

『酔翁談録』著録「小説」演目考

大塚秀高*

元代に刊行されたと推定される羅輝の『酔翁談録』は、その冒頭の「小説開關」において宋の盛り場、瓦子の演芸の一つである「小説」の演目百七種を八類に分かって著録している。この貴重な資料をめぐっては、複数の先学による研究業績があるが、演目だけからの推定には自ずと限界があり、その半数近くの本事が未だに明らかになっていない。本論は、自身のささやかな発明を加え、筆者においてこの方面の研究を整理したものである。

キーワード： 『酔翁談録』、「小説」、演目、本事

まえがき

『酔翁談録』甲集卷一舌耕作叙引の「小説開關」には、八類百七種にのぼる「小説」の演目が著録されている。この演目の具体的な内容については、先学によりさまざまに考証がなされてきた。筆者も、かつてこれを大学院の演習で取り上げる機会があり、参加してくれた院生諸君の啓発もあり、いささかそれを進展させることができたと考えている。そこで、それからかなりの年月をへてはいるが、以下にそれを披露することにした。公表を遅らせてきたわけは、関連する論文が多数にのぼり、そのすべてに目を通し、初稿発表時期ならびにその内容を明らかにできない以上、そこに見える創見のプライオリティを軽々しく論ずることはできないと考えたからである。だが研究史の解明は、筆者を含むすべての研究者にとりいよいよ厳しいものとなってきている一方、徐々にではあるがかつては知られていなかった資料も目にすることができるようになってきている。宋代「小説」の演目を研究しようとする者が絶滅危惧種になりつつある現在、浅学菲才を顧みず、思い切って、積年の宿題に解答をだし、千里の道の一里塚にしておきたいと考えた。なお、この演習に参加してくれた諸君は、辻りん、池田智恵、松浦智子、岩田和子、小山美樹、田中日出雄、伴俊典の七名である。

ちなみに、宋代「小説」の演目研究は、筆者が大学院生のおり、尾上兼英師ちなみに、宋代「小説」の演目研究は、筆者が大学院生のおり、尾上兼英師が取り上げられたものであった。筆者の初期の論文、「話本と「通俗類書」—宋代小説話本へのアプローチ—」(『日本中国学会報』28, 1976.10)及び「『緑窗新話』と『酔翁談録』—万暦時代の『緑窗新話』—」(『日本中国学会報』30, 1978.10)と「『緑窗新話』にみる宋代小説話本の特徴—「遇」をめぐって—」(『中国古典小説研究』7, 2002.3)は尾上師のこの演習なくしては存在しえなかったものである。ここに改めて感謝の意を表するゆえんである。

* おおつか・ひでたか、埼玉大学名誉教授、中国俗文学

一 研究史

当然といえば当然だが、研究には深化の歴史がある。現在は常識となっていることも、最初にそれを発見した人がいて、はじめて常識となるのである。そこでまずはこのテーマに関する研究史を整理、確認しておきたい。

もちろん、開幕を飾るのは『酔翁談録』の発見である。『酔翁談録』は薄井恭一氏により、1940年に伊達藩の書庫観瀾閣で発見された。「廬陵羅燁編」と題される。薄井氏は長澤規矩也氏と連名で、「新編酔翁談録について」なる報告を『書誌学』15-4(1940.10)に掲載された。文求堂から『観瀾閣蔵孤本宋槧 酔翁談録』の影印本が刊行されるのにあわせてのことであった。この論文は、該書を宋末建安刊本とみて、金盈之撰と題される『適園叢書』本の『酔翁談録』と比較し、説話人の家数の問題などに触れたものであったが、「小説」の演目の考証はしていない。

なお、『酔翁談録』はその表装に鑑みて朝鮮伝来本とされる。原本は現在天理図書館に蔵されており、書影が『善本写真集二十七 中国古版通俗小説集』（臨川書店、1988）に収められているが、そこでは「宋末元初の刊か」とされている。薄井・長澤両氏の紹介を承けた阿部隆一氏は、その「天理図書館蔵宋金元版本考」（『ビブリア』75、開館五十周年記念特集号、1980.10）で、「寧ろ元前期刊と考えたい」とされた。また、入矢義高氏は筆者あての私信で、「私は元末刊本であろうと考えます」とされ、乙集巻之一の「静女私通陳彦臣」の末尾の詩の首句、「來時嫌殺月兒明」が元の胡祇適の「一半兒」詞の「孤眠嫌殺月兒明」にもとづき、乙集巻之二の「王氏詩回吳上舍」の話が、『元詩紀事』巻36所引の『詩話雋永』にみえることを挙げられた¹。刊行時期が元以降であることに異論の余地はもはやあるまい。

中国の学界はすぐさま『酔翁談録』の発見に反応し、早くも1941年1月4日の香港『星島日報』の副刊「俗文学」の第1期に、戴望舒の按語を付し『酔翁談録』の「舌耕鉞引」を転載した²。この按語は「跋酔翁談録」と改題のうえ、後に、吳曉鈴によって編集された戴望舒の論文集『小説戲曲論集』（作家出版社、1958.2）に収められた。戴望舒は明・李詔の『戒庵老人漫筆』（巻6「子言小説名」）に『酔翁談録』の名がみえることに言及しており、それを承けた趙景深の「因『酔翁談録』的發現重估話本的時代」（『星島日報・俗文学』第6期、1941.2.8）は、『戒庵老人漫筆』の『酔翁談録』からの引用が断章取義であることを指摘した。趙景深のこの論文は後に「重估話本的時代」と改題され、その論文集『銀字集』（永祥印書館、1946.3）に収められた³。

¹ そもそも「王氏詩回吳上舍」については、乙集巻2の「吳氏寄夫歌」の作者吳伯固女とともに、上海古典文学出版社より1957年に排印された『新編酔翁談録』（中国文学参考資料小叢書第一輯之一）の「校印説明」でも言及されていたし、P.Hanan「宋元白話小説—評近代繫年法」（“Sung and Yuan Vernacular Fiction: A Critique of Modern Method of Dating”, HJAS30, 1970, 王秋桂編『韓南中国古典小説論集』所収、聯経、1979.9）の注でも言及されていたから、筆者の完全な失考であった。

² 『星島日報・俗文学』副刊については、馬幼垣の「香港《星島日報》「俗文学」副刊全目—解題」、原載『馮平山図書館金禧紀念論文集』（香港大学馮平山図書館、1982）に詳しい。馬氏の『実事与構想—中国小説史論釋』（聯経、2007.9）に再収されている。

³ 李詔が『酔翁談録』から引用する際、「小説引子」を「小説引」と「子」に分け、「子」

趙景深の「重估話本的時代」（『星島日報・俗文学』）に掲載された「因『酔翁談録』的發現重估話本的時代」は未見なため、以下の引用、言及はすべてこれによるは、『酔翁談録』著録の話本名目を百七種とみて、これを孫楷第の『中国通俗小説書目』の初版（中国大辞典編纂處・国立北平図書館、1933.3）著録の『宝文堂書目』巻中・子雑にみえ、孫楷第が巻1 宋元部に「小説」として著録した十三篇の作品に比定し、なおかつ『水滸伝』『楊家将』『平妖伝』『西遊記』などにもとづく九種の存在を指摘し、唐の伝奇によるものを三種挙げるなどしたものであった。ちなみに、「重估話本的時代」には『俗文学』副刊の編輯を担当した戴望舒の按語が附されており、趙景深の指摘漏れを補っているから、この論文、実質的には両者の共著論文とでもいうべきものであった。

『俗文学』に趙景深論文が掲載された同じ期に「無声戯与十二楼」を発表した譚正璧は、おそらく趙論文に刺激されてであろう、その後立て続けにこのテーマに関する論文を発表した。「宋元話本存佚考」（『正言文芸』第1巻第6期）、「宋元戯劇与宋元話本」（『戯曲月刊』第1期）、「『酔翁談録』所録宋人話本考」（『万象』第1年第12期、1942.6）などがそれである（ちなみに、以下に述べる筆者の譚氏の「小説名目」に関する考察は、「『酔翁談録』所録宋人話本考」とその改題時に二度に亘って施された「改正」を中心に据えたものである）。この論文を含め、譚氏のこの時期の論考は、後日その論文集『話本与古劇』に収められ刊行される際、二度、三度と「改正」が施されている。『話本与古劇』には1956年6月上海古典文学出版社版と、これを重訂した1985年4月上海古籍出版社版とがあり、「『酔翁談録』所録宋人話本考」も「酔翁談録所録宋人話本名目考」、更には「宋人小説話本名目内容考」と改題もされている⁴。筆者はこうした「改正」を学者としてはしかるべき態度と考えるものであるが、プライオリティを論ずる際には、原載論文にあたるなどの確認作業が欠かせなくなってくる。だが現状はそれどころか、原載誌発行の年月さえ確認が難しい場合がほとんどである。幸い「『酔翁談録』所録宋人話本考」については『万象』掲載の論文を目撃し得たので、以下ではこれをA論文、「酔翁談録所録宋人話本名目考」をB論文、「宋人小説話本名目内容考」をC論文とし、必要に応じ区別して論ずることにしたい⁵。なお譚正璧が『正言文芸』

以下を孔子の言葉と理解していただきたいことについては、趙景深のみならず、後の研究者も一人として言及していない（篇名を「子言小説名」としていた）。その全文「酔翁談録引子言小説者、或名演史、或謂合生、或称舌耕、或作挑閃」は、『酔翁談録』甲集巻1 舌耕紋引「小説引子」の冒頭の「小説者流…或名演史、或謂合生、或称舌耕、或作挑閃…」と「小説開關」冒頭の「夫小説者…」とを融合したものであった。

⁴ 上海古籍出版社版の「結論」の末尾には、「一九四二年一月廿六日初稿 一九八二年十二月三次補正」とある。

⁵ 譚正璧には、上記以外にも「宝文堂書目所録(藏)宋元明人話本考」「唐代(人)伝奇給与後代文学的影響」「緑窗新話与酔翁談録」などの関連する論考や、「小説」と同題あるいは同内容を扱った戯曲について研究した論考、「武林旧事所録宋官本雜劇段数内容考」「輟耕録所録金院本名目内容考」「宦門子弟錯立身所述宋元戯文(名目)二十九種(内容)考」(『風雨談』3, 1943)「永樂大典所収宋元戯文三十三種(内容)考」(『中華月報』6-3, 1943)などの関連論文がある（以上はすべて原載論文未見につき、上海古典版『話本与古劇』における題名、内容による。題名の下線部は上海古籍版では削除され、()内が新たに追加されており、内容にも補正が追加されている）。これら

第1巻第6期に発表した「宋元話本存佚考」は1941年7月1日が初稿で、上海古籍版『話本与古劇』所収の、改題された「宋元話本存佚綜考」は、1955年8月7日と1982年12月の補正をへているという。この論文は『醉翁談録』所録宋人話本考」と相補の関係にあるため、未見の「宋元話本存佚考」を除く「宋元話本存佚綜考」の新旧稿については、必要に応じb論文、c論文と区別して紹介することにした。

なお『醉翁談録』「小説開闢」に見える「小説」演目の内容比定にあたっては、『醉翁談録』以前に発見され、ブームを巻き起こしていた三言二拍の本事研究の影響も見過ごせない。三言二拍所収の話本、擬話本、これに先行するいわゆる『清平山堂話本』『熊龍峯四種小説』や『通俗類書』、嘉靖間の蔵書家晁璠（とその子東吳）の蔵書目『宝文堂書目』巻中・子雜著録の単行「話本」などが必然的にその論述の対象となってくるからである。それゆえ当然この方面の研究史についても紹介しなければならないわけであるが、そこまで間口を広げると筆者の能力に余るし、紙幅の問題もでてくる。よって、その方面については、『醉翁談録』の研究に関わった研究者の業績に限り、その論文、著述名を注に挙げ、責めを塞ぐことにしたい⁶。

の論考は、ややもすれば主客転倒の嫌いなしとしないが、『醉翁談録』に著録される「小説」と同内容あるいは些少の相違を伴った同一類型の話柄の戯曲の、『醉翁談録』に前後する時代における流布状況を知り、当該「小説」の本事を検討する際の重要な傍証を提供してくれている。ところがこれらの論考の多くもその発表時期や掲載誌の確認が難しい。よって、本論でこれらに言及する際には、初出稿が確認できたものを除き、上海古典版を基準とし、上海古籍版での補正の有無を論ずるものであって、初出稿の状況如何については以後の研究に待つものであることを予め明らかにしておきたい。なお譚正璧は戯曲、小説の研究者であるが、どちらかといえばその研究の重点は戯曲にあり、A論文執筆時には、1936年から翌年にかけて『藝文雑誌』に発表された『緑窗新話』も、肝腎の『醉翁談録』の「舌耕敘引」以外の部分も見えていないか、その重要性に気づいていなかったようであって、論述の中心は、諸書に著録される、題名から「小説」演目と同内容かと推定された宋以降の戯文、雑劇、伝奇（それらの多くは現佚）の名目の紹介にあった。この時代は、中国における古典戯曲、小説研究の疾風怒濤の時代にあたり、譚正璧に限らず、当時の研究者は内容の正確さより発表の遅速を重んじ、先を争うように「論文」を執筆し、毎週末に刊行される各種新聞の副刊などにそれを掲載していた。このため主として論ぜられるべき対象がまったく言及されず、いわば附録にあたる部分が長々と論ぜられていることが多かった点は遺憾である。

⁶ 長澤規矩也に「京本通俗小説と清平山堂」（『東洋学報』17-2, 1928.10）が、孫楷第に「三言二拍源流考」（『北平図書館館刊』5-2, 1931, 後に孫氏の論文集『滄州集』、中華書局、1965.12に収められる）が、趙景深に『小説閒話』（北新書局、1937.1）所収の「拍案驚奇的来源和影響」（1933.10.7初稿）、『小説戯曲新考』（世界書局、1939.1）所収の「警世通言的来源和影響」（1936初稿）、「醒世恒言的来源和影響」（『文学』8-4, 1937.4.1初稿）、『銀字集』（永祥印書館、1946.3）所収の『喻世明言的来源和影響』（『学術』1, 1940初稿）、『中国小説叢考』（齊魯書社、1980.1）所収の「二刻拍案驚奇的来源和影響」（1946初稿）があり（ちなみに上記趙論文はすべて『中国小説叢考』に再収されている）、譚正璧の上海古典版『話本与古劇』には「三言兩拍本事源流考」（1944初稿）が、上海古籍版にはその1982.3四次補正版が収められている。なお、譚正璧には『三言兩拍資料』（上海古籍出版社、1980.10）があり、その「出版説明」

趙景深、譚正璧に続く中国のこの方面の研究業績としては、孫楷第の『中国通俗小説書目』第二版(作家出版社, 1957.1)を挙げるべきであろう(以下「孫目第二版」と略称する)。孫楷第は「十條龍」「陶鉄僧」「種叟神記」の三種を省いた百四種のみを、「右八類一百零四種見醉翁談録小説開關篇。此篇小説名皆直行連書。其応合若干字為一詞有不易辨者, 今以意定之」と断つたうえで著録し、上記三種については孫目初版の時点ですでに『宝文堂書目』により巻1・宋元部に著録していた「山亭児」及び「種瓜張老」とみなし、それに追記する形をとった。この方針は、初版の体例にこだわった孫氏と、病気の孫氏に替わり、初版以後の孫氏以外の研究者による研究成果も盛り込もうとした弟子の張榮起の間に成り立った、一種の妥協の産物と推察されるが、『醉翁談録』著録の「小説」名目があたかも百四種であったかのごとき印象を与える。『醉翁談録』と『宝文堂書目』の成立時期の先後に鑑みても、もとの方針を転換し、百七種を一括して巻1の冒頭に掲げ、そこに『宝文堂書目』著録の作品の存否を注記すべきであった。

ちなみに孫目の初版は、『宝文堂書目』著録の「山亭児」を『警世通言』巻37「万秀娘仇報山亭児」に比定する際、その末尾の「話名只喚做(作)山亭児亦名十條龍陶鉄僧孝義尹宗事跡」を引き根拠としたが、なぜか下線部「陶鉄僧」の三文字を落としていた。譚正璧A論文は『警世通言』の当時通行本にはこの篇が収められていなかったためか、孫目初版をそのまま引いたが、B論文では修正しており、孫目第二版はおそらくこれにより脱落を補ったとおぼしい。

ここで、趙、譚両氏に続き、孫目第二版に先立ち『醉翁談録』著録の「小説」を全般的に論じた研究者として、日本の上村幸次と稲田尹を挙げておきたい。上村幸次の「醉翁談録を通じて見た宋代の説話に就いて」(『山口大学文学会誌』4-2, 1953.11)はこのテーマの研究に少なからざる貢献をした。やや遅れて「醉翁談録と太平広記」(『神田博士還暦記念書誌学論集』所収, 平凡社, 1957.11)を発表した稲田尹の貢献とともに、明記しておく必要がある。中国人研究者が二人の業績に言及しないのは、当時であってはやむをえない面があったにせよ、はなはだ遺憾なことといわねばならない。両氏の研究は『醉翁談録』の「小説開關」に、「幼習太平広記」「須還緑窗新話」とされている『太平広記』や『緑窗新話』に当該「小説」の本事を探ったことにその特徴がある。『緑窗新話』は呉興嘉業堂蔵抄本が1936年から翌1937年にかけて、上海藝文社刊行の『藝文雑誌』の第1巻第2期から第6期に分載され、『醉翁談録』に先じて斯界に広く知られるようになっていた(拙論「『緑窗新話』と『新話摭粹』—万曆時代の『緑窗新話』—」を参照されたい。なお上村氏の論考は旧仮名遣いによるため、本稿では新仮名に直して引用している)。なおやや遅れるが、尾上師に「庶民文化の誕生」という一文があり、『醉翁談録』の「小説」演目に言及している(岩波講座『世界の歴史』第9巻中世三, 岩波書店, 1970.2)。

台湾では、1969年12月に台湾大学文学院から樂蘅軍の『宋代話本研究』が、

によると、「本書於一九六三年打成紙型而未遑印行。現將原紙型挖改個別訛誤付印出版」したものである。胡士瑩は『話本小説概論』の第13、14両章を明代話本、擬話本の本事研究にあてている。なお、小川陽一に『三言二拍本事論考集成』(新典社, 1981.11)があり、以上の論文、著述を含めたこの方面の先達の業績に小川自身の創見も加え整理しており、参照すべきである。

1973年8月に文史哲出版社から李本耀の『宋元明平話研究』が、同年12月に黎明文化事業股份有限公司から潘寿康の『話本与小説』が刊行された。いずれもその一部で『酔翁談録』著録の「小説」の演目につき考証している。『宋代話本研究』にあっては第3章の1「話本的著録」が、『宋元明平話研究』では第3章第1節「宋話本之著録」がそれにあたる。但し、いずれにもこれといった創見はみあたらない。『話本与小説』には「現存宋元話本考」「蘇長公章臺柳伝」が収められる。『話本与小説』は既発表の論文を集めたものというから、『酔翁談録』著録の「小説」十種を考証するその「現存宋元話本考」なども先立っていずれかの学術誌に発表されたものかと思われるが、その点についてはいまだ明らかにしていない。但し、プライオリティが問題となるような創見はない。

それゆえ上村、稲田兩氏の後を襲った研究者としてまず挙げるべきは（本人の意識としては趙、譚兩氏であろうが）胡士瑩ということになる。その『話本小説概論』は、胡士瑩が1979年3月8日に亡くなった後の1980年5月に中華書局から刊行されたが、1977年1月15日付けの自身の「後記」が附され、1977年10月1日付けの趙景深の序が冠されているから、その生前に完成していたとみてよかろう。胡士瑩の遺著『宛春雜著(増訂本)』（浙江文芸出版社、1984.8）に附された、陳翔華、陸堅、蕭欣橋連名の「胡士瑩先生伝略」によれば、『話本小説概論』は1962年4月に十三章からなる初稿油印本が大学院の講義用に作られ、1965年10月時点で第十四章が増補されたものが徵求意見稿として専家に送られた後、文革中も引き続き増補されていたものをもとに、1973年冬から1974年初めにかけて完成されたものであるとされる。そこにみえる創見のいくつかは、こうした長期間に亙る増補の過程で生み出されたものと思われるが、初稿や徵求意見稿を目にすることができない以上、中華書局版が刊行された1980年のものとして扱わざるを得ないのが遺憾である。

『話本小説概論』以後のこの方面の研究としては、論文に謝悅の「《酔翁談録》所載小説名日本事考」（『学林漫録』10, 1985.5）が、著作に陳桂声の『話本叙録』（珠海出版社、2001.12）があり、この他にも『小説開關』所見の百七種の「小説」演目のいくつかに個別に言及する論文なら複数存在するが、それらについては当該の演目で紹介することにしたい。

最後に『酔翁談録』の概要につき簡単に触れておく。巻首題は「新編酔翁談録」。次行に「廬陵 羅燁編」と記す、每半葉十一行、每行二十字。甲から癸の十集、各集二卷からなる。甲集卷一舌耕叙引は「小説引子」と「小説開關」の二篇からなり、「小説引子」の題下注に「演史講経並可通用」とある。問題の「小説」の演目は「小説開關」にみえ、以下のようになっている（多くの研究者により「鬼」の誤りとみなされる「兒」については、そのまま翻字した）。

夫小説者（中略）有靈怪、煙粉、伝奇、公案、兼朴刀、捍棒、妖術、神仙。
（中略）説楊元子、汀州記、崔智韜、李達道、紅蜘蛛、鉄甕兒、水月仙、大槐王、妮子記、鉄車記、葫蘆兒、人虎伝、太平銭、芭蕉扇、八怪国、無鬼論、此乃是靈怪之門庭。言推車鬼、灰骨匣、呼猿洞、閻宝録、燕子楼、賀小師、楊舜兪、青脚狼、錯還魂、側金盞、刁六十、鬪車兵、錢塘佳夢、錦庄春遊、柳參軍、牛渚亭、此乃為煙粉之総龜。論鶯々伝、愛々詞、張康題壁、錢榆罵海、鴛鴦灯、夜遊湖、紫香囊、徐都尉、惠娘魄偶、王魁負心、桃葉渡、牡丹記、花萼楼、章臺柳、卓文君、李亜仙、崔護覓水、唐輔採蓮、此乃為之伝奇

言石頭孫立、姜女尋夫、憂小十、駙塚兒、大焼灯、商氏兒、三現身、火炊籠、八角井、藥巴子、独行虎、鉄秤槌、河沙院、戴嗣宗、大朝国寺、聖手二郎、此乃謂之公案。論這大虎頭、李從吉、楊令公、十條龍、青面獸、季鉄鈴、陶鉄僧、頼五郎、聖人虎、王沙馬海、燕四馬八、此乃為朴刀局段。言這花和尚、武行者、飛龍記、梅大郎、鬪刀楼、攔路虎、高拔釘、徐京落章、五郎為僧、王温上辺、狄昭認父、此為捍棒之序頭。論種叟神記、月井文、金光洞、竹葉舟、黄粮夢、粉合兒、馬諫議、許岩、四仙鬪聖、謝塘落海、此是神仙之套数。言西山聶隱娘、村鄰親、巖師道、千聖姑、皮篋袋、驪山老母、貝州王則、紅線盜印、醜女報恩、此為妖術之事端也（後略）。

以下では類ごとに、演目の順に従いつつこれまでの研究史を追う形で本事比定の進展状況を明らかにし、最後に筆者の見解を述べることにしたい（但し、あらすじの紹介は長くなるので極力省くことにしている。当該書ないし当該論文を見られたい）。

二 靈怪之門庭

「靈怪之門庭」に配される「小説」の演目を論ずるにあたっては、これまでの研究者が「小説開關」の靈怪の「演目」としていかなる内容のものをあらかじめ想定していたかを明らかにしておく必要がある。この想定はあくまでも予測であるから、靈怪の実際の含意については比定の結果により検証され修正されるべきものであることはいうまでもない。靈怪「小説」のカテゴリーにつき、譚正璧は「這類話本の内容、大都是些普通的妖異鬼怪故事、但凡關於女鬼、神仙、妖術的都不在內、因為它們在後面都另有專類」と述べた。他の研究者もこれに同意しているとおぼしく、ほとんど意見を述べていない。比定の結果もそれを支持しているようにみえるから、筆者もそれで差し支えないと考えている。

1 楊元子

譚正璧は明・趙璠の『宝文堂書目』巻中・子雜著録の現失伝の「慕道楊元素逢妖伝」がそれではないかとし、「子」は「素」の字譌ではないかと述べる。楊元素は『宋史』（巻 322。なお以下の丸括弧内は筆者の補足である）に伝が立つ楊絵のことであるが、「慕(マ)道逢妖」のことは「民間伝説」に出るのではないかとする。

胡士瑩、陳桂声も譚説を襲い、関連事項を追加するが、挙げられる楊絵の逸事はいずれも靈怪とするに足りないとする。ちなみに孫楷第は佚とする。

筆者案ずるに、周清源の『西湖二集』巻 13「張採蓮隔年冤報」は、秦檜と同時代人の楊道元が太乙天心五雷正法をもちい、神将を駆使して妖怪を捉えることを語る。この楊道言が楊元子である可能性はないか。以下に關係する部分を引く。

原来楊道元有一身奇異的本事

善識天下怪 能除世間妖 行持五雷法 魔鬼一時消

説話楊道元行持太乙天心五雷正法，善能驅神遣將，捉鬼降妖。曾以符水鴟梟眼目洗眼，煉就一双神眼，那鬼怪到他面前，他便一一識得。因此…

なお、北京図書館蔵明写本によったとする古典文学出版社 1957 年 12 月の『宝文堂書目』では、「慕道」でなく「墓道」となっている。とはいえ『宝文堂書

目』には「真宗慕道記」や「張子房慕道」も著録されるから、「慕道」で差支えはあるまい。胡士瑩は正しく「墓道楊元素逢妖伝」とし、「“墓道逢妖”事、当出于民間伝説」とする。

2 汀州記

譚正璧はA論文で、趙景深論文の戴望舒の按語、「望舒案：汀州記疑即夷堅乙志卷七之汀州山魃，水月仙疑即夷堅丙志卷十四之水月大師符」（『星島日報』附鐫「俗文学」第6期，1941.2.8）に従い「汀州山魃」の内容を要約紹介した後、「不知是否就是話本所取材」とするが、C論文ではこれに続け、『夷堅支志』巻8の「汀州通判」及び宋・王明清の『投轄録』の「汀州民」を紹介し、「以上二事，亦有写成話本的可能」とする。

稲田尹は「汀州記」に『太平広記』巻361妖怪三の「元自虚（出会昌解頤録）」をあて、続けて宋・曾慥の『類説』巻8所引『集異録（記）』の「山魃報冤」を引き、「甚だ似ている」とし、「山魃の事，広記に見えるもの次の如し」として『太平広記』巻428虎三の「斑子（出広異記）」と同巻の「劉薦（出広異記）」を挙げ、「「汀州記」を…「汀州山魃」によるものとする説があるが，広記の「元自虚」によるという説も亦成り立つ」とする。

胡士瑩は「汀州山魃」を紹介し、「惟其叙述故事情節和人物性格，不甚突出，疑説話人數衍時必多所增益」とする。

筆者案ずるに、「汀州記」としては『夷堅支景志』巻8の「汀州通判」がよりふさわしい。「汀州通判」の主人公は宗室忘其名とされるが、「汀州山魃」の主人公趙子璋である。しからば「汀州記」は「汀州通判」と「汀州山魃」を組み合わせたものであったかも知れない。また『類説』巻8所引の唐・戴孚『広異記』に「山魃一足」があるが，山魃の概説にとどまる。なお汀州を中心とする地域に出没するこの一本足の山魃については，筆者の「宋代社会と物語」（『東洋文化研究所紀要』129，1996.2）が詳しい。

3 崔智韜

譚正璧は『武林旧事』巻10「官本雜劇段数」により，宋の官本雜劇に「崔智韜艾雌虎児」及び「雌虎 崔智韜」があったことを指摘し（いずれも現失伝），その本事を「出唐人薛用弱的集異記，亦見太平広記四百三十三（虎八「崔韜（出集異記）」）引。但人名祇作崔韜，而没有「智」字」とし，あらすじを紹介した後，「又太平広記卷四百二十七引原化記天宝選人一則，本事略同。但無選人姓名，而且雌虎於復原状後也没有把丈夫和兒子喫去，当為一事兩伝」とする。孫目第二版は譚正璧を襲う。

上村幸次は董解元『西廂記諸宮調』巻頭（巻上「柘枝令」）に「也不是崔韜逢雌虎」とあることを挙げ，諸宮調がかつて存在したとする。

胡士瑩は金院本打略控搗に「虎皮袍」のあること，元・関漢卿の『金綫池』雜劇の正旦の歌に「鄭六遇妖狐，崔韜逢雌虎，那大曲内尽是寒儒者」云々とあることにより，大曲でも演ぜられていたこと，『録鬼簿続篇』により佚名の「人頭峰崔生盜虎皮」雜劇があったことを追加する。

陳桂声は『太平広記』巻429虎四の「申屠澄（出河東記）」に言及し，『太平広記』の三篇中ではこれが「最詳」であるとす。

筆者案ずるに，「崔智韜」の本事は「崔韜」に相違ない。雌虎が脱いで女人になっている間に隠された皮を見つけ虎にもどる話は複数あるが，最も人口に膾炙したものは崔韜を主人公とするものであった。『類説』巻29「靈怪集」

に「虎脱皮為女子」があり、崔韜のことを述べている。

4 李達道

譚正璧はA論文で待考としたが、B論文で宋・李献民の『雲齋広録』巻5麗情新説の「西蜀異遇」を本事にあて、「此事不見他書記載、亦無戲劇家用作題材」とする（『雲齋広録』は1936年2月に上海の中央書店より排印本が刊行されている）。

胡士瑩はこれに加え、邵博の『河南邵氏聞見後録』巻30の「程致仲為予言、近歳、雲齋小書出丹稜李達道遇女妖事、不妄。致仲親見泥金鴛鴦出入雲氣中、黄色衣、奇麗奪目、非人間之物、蓋妖所服、留以遺達道者。又歌曲多仙語、尚小書失載云」を引く。この部分、譚正璧C論文に取り込まれている（「雲齋小書」は『雲齋広録』のことであろう）。

筆者案ずるに、『雲齋広録』の「西蜀異遇」が本事に相違ない。『雲齋広録』については、阿部隆一「中華民国国立中央図書館等蔵宋金元版解題」（『増訂中国訪書誌』所収、汲古書院、1983.3）の「[金]刊『新雕雲齋広録』」が参考になる。海内の孤本。

5 紅蜘蛛

趙景深は当初「紅蜘蛛」に『宝文堂書目』の「紅白蜘蛛記」と『醒世恒言』巻31の「鄭節使立功神臂弓」を挙げたのみであったが、後の「醒世恒言的来現和影響」（初出論文未見。『小説戯曲新考』所収、世界書局、1939.1。『中国小説叢考』所収のものには跋後に「1937年4月1日」とある）の「鄭節使立功神臂弓」では、『南九宮譜』巻4の「黄鐘賺集六十二家戯文名」所引の佚名「鄭將軍紅白蜘蛛」に言及し、『曲海總目提要』巻28に見える後人の「井中天」伝奇は、主人公の鄭信を李遂に改め、『平妖伝』故事をまじえたものとする。但しこの論文は「紅蜘蛛」には言及しない。

譚正璧は「紅蜘蛛」と同題材の雑劇として、『録鬼簿続篇』にみえる楊景言（暹）「紅白蜘蛛」を加え、「井中天」の作者を清・張大復とする。b論文は「紅蜘蛛」の項で「鄭節使立功神臂弓」と「紅白蜘蛛記」に言及する。a論文は不明。

胡士瑩は以上に加えて『九宮正始』の「鄭信」を挙げる。

黄永年は「記元刻《新編紅白蜘蛛小説》残頁」（『中華文史論叢』1982-1）で、『醒世恒言』巻31の「鄭節使立功神臂弓」がもとづく元刻の「新編紅白蜘蛛小説」残葉（最終葉）の現存を論じた（西安市文物管理委員会蔵）。

筆者案ずるに、『大明一統志』巻59の武昌府山川に「蜘蛛井 在府治南鉄仙寺内。世伝唐時有紅白二蜘蛛、化為妖婦、以媚人。故鑄鉄仏鎮之」、寺観に「鉄仏寺 在府城中。梁邵陵王建」とあり、袁珂『中国神話伝説詞典』（上海辞書出版社、1985.6）に「蜘蛛井 《古今圖書集成、禽虫典》巻一七七引《江夏志》」として先の文が引かれ、「按宋人小説有“紅白蜘蛛”。今存《醒世恒言》巻三十一、題作“鄭節使立功神臂弓”，即演此事」とある。武昌の蜘蛛井の伝説が「紅蜘蛛」である可能性は十分だが、それと「新編紅白蜘蛛小説」の関係については不明。なお『江夏志』は同治八年刊本が東洋文庫に蔵される。佚名『湖海新聞夷堅続志』後集巻1道教門・道法の「法誅蛛怪」には二女と蛛怪が登場するが、紅白蜘蛛でも二女が蜘蛛の化身でもないから無関係であろう。なお『宝文堂書目』巻中・楽府に「白蜘蛛記」が著録される。

6 鉄甕児

譚正璧は待考とする。

胡士瑩は『太平広記』巻318(鬼三)の「彭虎子(出稽神録)」に似るとする(明鈔本作「出幽明録」)。

筆者案ずるに、李詡の『戒庵老人漫筆』巻6「宋慈雲僧夢」に「宋慈雲僧姓袁名道、少為士子、遊京師西池、遇老僧留語、恍惚夢入巨瓮中、榮頭而寤、後出家超脱。与邯鄲枕相類。出青瑣高議、此書龐雜不足伝」とある通り、宋・劉斧『青瑣高議』前集巻2所収の「慈雲記 夢入巨甕因悟道」が本事であろう。『類説』巻46所集「青瑣高議」に「身入甕中」として収められる。なお佚名の『湖海新聞夷堅続志』後集巻2仏教門・仏化の「身外有身」はその簡略版である。ちなみに『青瑣高議』と「小説」との関係については、筆者の「宋代の通俗類書—『青瑣高議』の構成、内容よりみる—」(『日本アジア研究』6, 2009.3)を参照されたい。

7 水月仙

譚正璧は既引の『俗文学』第6期にみえる戴望舒の『夷堅丙志』巻14の「水月大師符」とする説を紹介し、あらずじを述べる。

孫目第二版は「刑鳳遇西湖水仙」の事を演じたかとし、事は『緑窗新話』と田汝成『西湖遊覧志餘』巻26(幽怪伝疑)に見えるとする。

胡士瑩は孫説に同意したうえ、『宝文堂書目』巻中・子雑に「刑鳳此君堂遇仙伝」が著録されることをいい、『西湖二集』巻14「刑君瑞五載幽期」は『艷異編』巻2水神部の「刑鳳」であり、本事は『緑窗新話』巻上の「刑鳳遇西湖水仙」であるとして戴説を否定し、唐・沈亜之『異夢記』に見える刑鳳の逸話は「水月仙」と無関係とする。

筆者案ずるに、本事は『緑窗新話』の「刑鳳遇西湖水仙」に相違ない。『太平広記』巻282夢七「刑鳳(出異聞録)」は「刑鳳遇西湖水仙」の前半に相当するが、後半の五年後刑鳳が西湖で水月仙に遇う下りがない。『太平広記』同巻の「沈亜子(出異聞集)」は別の話。『類説』巻28所収の「異聞集」に「刑鳳」は収められていない。唐・谷神子『博異志』の「沈亜子」は「刑鳳」の簡略版である(ちなみに、当時の研究環境のしからしむるところではあるが、唐以前の伝奇小説を本事に比定する際は『太平広記』か『類説』を挙げるべきで、明代以降の叢書を挙げるべきではない)。「刑鳳遇西湖水仙」は都が杭州に移った南宋以降に杭州で改作されたものであろう。筆者の「龍神から水仙へ—涇河幻想—」(『日本アジア研究』1, 2004.3)に詳しい。なお、『情史』巻19情疑類に『西湖遊覧志餘』巻26幽怪談疑による「西湖水仙」が収められる。また『永樂大典』巻20739雑劇三に「十詠水仙子」が収められるが、「水月仙」との関係は不明。

8 大槐王

譚正璧は趙景深の「因『醉翁談録』的発現重估話本的時代」の李公佐の「南柯太守伝」ではないかとする説を紹介し、『太平広記』巻475昆虫三所収のものは「淳于棼(出異聞録)」とすること、明・湯顯祖に『南柯記』伝奇があることなどを述べる。C論文はこれに、『輿地紀勝』巻37所引の「広陵行録」が揚州に南柯太守の墓があることを紹介し、主人公を実在の人物かと疑い、明・車任遠に『南柯夢』雑劇のあることを追記する。

稲田尹は「広記に「大槐王」の名が見えるもの」として、巻416草木十一の「江叟(出伝奇)」を挙げ、「説話としては複雑で興味のあるものであるが、「大槐王」と題するには適当でない」とする。

胡士瑩は「江叟」を本事とする。

陳桂声は周楞伽が『裴鉞傳奇』（上海古籍出版社，1980.10）の注で「江叟」を「大槐王」とは「大概没有甚麼関渉」とする説を引き、胡説を否定する。

筆者案ずるに、本事は『太平広記』の「淳于棼」，ないしこれを「南柯太守伝」として引く『類説』巻28の「異聞集」であろう。『異聞集』については王夢鷗『唐人小説研究』二集「陳翰異聞集校補考釋」（藝文印書館，1973.3），程毅中「《異聞集》考」（『文史』7，1979.12）が詳しい。ちなみに『類説』巻32の「伝奇」に「江叟」が収められている。

9 妮子記

譚正璧A論文は金院本に「妮子記」があることを指摘し，B論文で元・関漢卿の「詐妮子調風月」雑劇と佚名の宋元戯文「鶯燕争春詐妮子調風月」（『永楽大典』13977 戯文十三）を追記するが，内容については「不知是否相同」とし，劉斧『青瑣高議』の「泥子記」（『類説』巻46「青瑣高議」所引）を「疑話本即演此事而有所鋪張」とする。

胡士瑩は『類説』の「泥子記」が今本『青瑣高議』にみえないことを指摘のうえ，「妮」は「泥」の誤りとし，戯曲には言及しない。

筆者案ずるに，『湖海新聞夷堅続志』後集巻2 怪異門・物怪の「泥孩児怪」は「泥子記」と同一話柄であって，『情史』巻21「泥孩」、『堅瓠秘集』巻2「泥孩」に転引されている。「妮子記」は「泥子記」によったものであろう。現在，泥子、泥孩児は泥娃娃とよばれ，子授けの縁起物とされる。『泥娃娃 面白い中国の子授け縁起人形』（天理ギャラリー第40回展，1974.11）が参考になる。

10 鉄車記

待考。

11 葫蘆兒

趙景深は『宝文堂書目』（巻中・子雑）の「葫蘆鬼」に比定する。ちなみに『警世通言の来源和影響』（『小説戯曲新考』所収，『中国小説叢考』では跋後に「1936年」とある）では「一窟鬼癩道人除怪」を「京本通俗小説題作西山一窟鬼。拋鬼董卷四云」とのみ記す。

譚正璧A論文は趙景深説を継承する一方，唐・皇甫氏『原化記』（『太平広記』巻77 方士二）の「葫蘆生」に言及し，「疑葫蘆兒或即葫蘆生之誤」とする。C論文は葫蘆生説を補強すべく，『西陽雜俎』（『太平広記』巻460「裴沆」）、『河東記』（『太平広記』巻118「韋丹」）にみえる葫蘆生の占卦靈驗を語る条に言及する。

稲田尹は葫蘆生の登場する話柄を『太平広記』から複数挙げ，「葫蘆生に関する話は唐宋に於いて盛んに伝えられたと見られるから，酔翁談録の葫蘆兒は，譚氏の説の如く，葫蘆生の誤りであろう」とする一方，『太平広記』巻286 幻術三「胡媚児（出河東記）」などを挙げ，「又葫蘆兒は胡媚児の誤とも考えられぬこともない。然し内容の単純さから見て，葫蘆生には及ばぬ」とする。

胡士瑩は自身新たに提起した『平妖伝』第29回「杜七聖狼行続頭法」の，杜七聖が葫蘆兒をもちい，幻術により小児の頭を断つ故事については，「属妖術而非靈怪，疑非一事」とし，譚正璧の「葫蘆生」説については「未必是」としたうえで，道人が捉えた鬼どもを葫蘆に入れる点を根拠に，『京本通俗小説』（第12巻）の『西山一窟鬼』，即『警世通言』巻14の「一窟鬼癩道人除怪」ではないかとし，その本事に『鬼董』巻4の「樊生」を挙げる。

筆者案ずるに、「葫蘆兒」が靈怪に配される話本であることを重視すれば、「一窟鬼癩道人除怪」がそれで、本事は「樊生」となろう。「一窟鬼癩道人除怪」については、筆者の「宋代社会と物語」が詳しく論じている。なお、楽衡軍は「葫蘆魂」の誤りかとするが、具体的な比定はしていない。ちなみに、『類説』巻49所収の「殷芸小説」（殷芸は商芸が宋宣祖の諱を避け改めたもの）に「托胡蘆而生」があり、養父母に養われ後に盛名を得た胡広が胡を姓としたゆえんを、悪月五月生まれゆえ父母に胡蘆に入れ河岸に捨てられたからと語る（他に『紺珠集』『歳時広記』にも見える）。だがそこに靈怪というべき情節はない。

12 人虎伝

譚正璧は唐・李景亮の「人虎伝」と『太平広記』巻427虎二の「李徴(出宣室志)」を挙げる。

上村幸次は「人虎伝」「李徴」に加え、『太平広記』巻429虎四の「張逢(出続玄怪録)」を挙げ、「同種の説話」とする。

稲田尹は、「李徴」は李景亮の「人虎伝」と同じとしたうえで『太平広記』巻433虎八の「僧虎(出高僧伝)」を挙げ、「説話の興味から言えば、人虎伝に劣らぬ」という。

胡士瑩は「人虎伝」「李徴」に加え、明・東魯古狂生の『酔醒石』巻6「高才生傲世失原形 義気友念孤分半俸」を挙げ、「即根拠此故事縁飾而成」とする。譚正璧C論文は『酔醒石』以下を追加する。

筆者案ずるに、「靈怪之門庭」の「人虎伝」の本事は「李徴」に相違ない。明代の叢書所収の「人虎伝」は、主人公の人名などにこれと相違がある。

13 太平銭

譚正璧A論文は、宋元戯文に「朱文鬼贈太平銭」があり『永楽大典』巻13989戯文二十五に見え、『南詞絃録』に「朱文太平銭」が著録され、『南九宮譜』の「黄鐘賺集六十二家戯文名」に「昔有朱文太平銭、鬼為締婚」とあるからこれらが「太平銭」の題材であろうとする。『曲海總目提要』巻18に提要が挙がっている「太平銭」は、唐代の仙人張老が太平銭で韋氏の女を聘すというものであって、「仙而非鬼怪」だから戴望舒に従い(「神仙之套數」の)「種叟神記」にあてた方がよさそうだとする。「朱文鬼使太平銭」の内容についてはこの時点では「不甚可考」としたが、C論文では『輟耕録』から金院本の「綉篋兒」を拾い、『曲海總目提要』の「太平銭」は清初・李玉の作で『古本戯曲叢刊』第3集に収められるとしたうえで胡士瑩を襲い、閩戯の「朱文鬼使太平銭」のあらすじを紹介している。

胡士瑩は『警世通言』巻30「金明池吳清逢愛々」の引詩に「朱文灯火逢劉倩」とあると述べ、福建戯の『朱文太平銭』のあらすじを紹介し、これにはすでに鬼の情節がないから「頭已改編、但其内容可能還保存一些原始情節」とする。

筆者案ずるに、万暦甲午(22)刊本『新刊京本通俗演義全像百家公案全伝』の第99回が「一捻金贈太平銭」となっており、万暦甲辰(32)瀚海書林李碧峯陳我含刊本『新刻増補戯隊錦曲大全滿天春』の下巻に「一捻金点灯」「朱文走鬼」の二齣が収められている(『明刊閩南戯曲絃管選本三種』, 南天書局, 1992.5)。ともに「太平銭」と同一話柄に相違ない。いずれにも包公が登場する。なお銭南揚『宋元南戯百一録』(哈仏燕京学社, 1934.12)に「朱文鬼贈太平銭」, 同

じ銭南揚の『宋元戯文輯佚』(上海古典文学出版社, 1956.12)に「朱文太平銭」, 趙景深『元明南戯考略』(人民文学出版社, 1990.7)に「太平銭戯文和伝奇」があり参考になる。

14 芭蕉扇

戴望舒は「妖術之事端」の「驪山老母」とともに『西遊記』とする。

譚正璧はA論文において『西遊記』の「孫悟空三盗芭蕉扇」かもしれないとし, 楊景言『西遊記雑劇』では鉄扇とされ芭蕉扇とされておらず, 孫悟空に盗まれてもいないと述べ, 『西遊記』の芭蕉扇は『西遊記雑劇』をもとに「改称」されたのではないかと疑う。B論文はこれに加えて呉昌齡に「西天取経」雑劇, 金院本に「唐三蔵」があると述べ, 芭蕉扇の故事の有無は不明とする。

上村幸次は『西遊記』に触れ, 「本小説が若しこの西遊記のそれと同様とすれば, 現存の西遊記の源流を考える上で貴重な資料となる」とした後, 『大唐三蔵取経詩話』には「芭蕉扇の事なし」とする。

胡士瑩も『西遊記』を挙げるのみ。

15 八怪国

待考

筆者案ずるに, 芭蕉扇が『西遊記』の「孫悟空三盗芭蕉扇」であるなら, これも『西遊記』の第 89 回から 90 回にかけて, 九靈元聖、獠獅、雪獅、黃獅、狻猊獅、白沢獅、伏狸獅、博象獅の八怪が登場する玉華州であるかもしれない。

16 無鬼論

譚正璧は金院本に「無鬼論」(『輟耕録』卷 25 院本名目)のあることを述べ, 宋・李献民の『雲齋広録』卷 7 奇異新説の「無鬼論」が本事とする。

上村幸次は「鬼神の存在を否定した論議」として, 『太平広記』卷 317 鬼二の「宗岱(出雑語)」、卷 319 鬼四の「阮瞻(出幽冥録)」、卷 330 鬼十五の「崔尚(出玄怪録)」を挙げる。

稲田尹は以上に加え, 卷 323 鬼八の「施統門生(出搜神記)」を挙げ, 「最も説話として興味がある」のは「宗岱」であるとする。

胡士瑩は譚正璧を襲うのみ。

筆者案ずるに, 本事は『雲齋広録』の「無鬼論」ではあろう。『太平広記』卷 318 鬼三の「彭虎子(出稽神録。明鈔本作出幽冥録)」も無鬼論に言及する。『類説』卷 49 所収「殷芸小説」に「無鬼論」があり, 宗岱の事を簡略に述べる(『雑記』『続談助』にも見える)ほか, 『類説』未収ながら阮瞻の事を述べる條もある(『列伝』『続談助』)。戴望舒の『小説戯曲論集』に「《無鬼論》」が, 銭鍾書『管錘編』(中華書局, 1979.8)に「《太平広記》一四六 卷三三〇 無鬼論」がある。

三 煙粉之総亀

譚正璧は煙粉につき「旧皆以為女子之譬喩, 現在看了下面所列各篇的内容, 才知是女鬼の譬喩, 而与生人無関」とする。それでおそらく正しだろう。

17 推車鬼

譚正璧は待考とする。

胡士瑩は『太平広記』卷 319 鬼四の「周臨賀(出法苑珠林)」とする。

筆者案ずるに, 『太平御覧』卷 955「張伯遠(出甄異伝)」に, 張伯遠十歳の

おり仮死状態におちいり、泰山の麓で十余人の幼児と大車を推したが招魂によって蘇生した話が収められている。『甄異伝』は戴祖の撰。魯迅の『古小説鈎沈』に輯本がある。『法苑珠林』に「周臨賀」は捜し出せていない。管見では『太平広記』で出処を『法苑珠林』とする百二十三条のうち、六十四条がいまだ『法苑珠林』に該当条をみいだせていない。ちなみに、『法苑珠林』を出処とされる残る五十九条の内訳は、『冥祥記』二十五条、『冥報記』十一条、『冥報拾遺』十四条、『冥報記・冥報拾遺』三条などとなっている。

18 灰骨匣

趙景深は『銀字集』所収の「喻世明言的来源和影響」（『中国小説叢考』再収の際、末尾に「1940年」と附記された）で、『古今小説』巻24「楊思温燕山逢故人」につき、孫楷第の「三言二拍源流考」の、『宝文堂書目』巻中・子雜著録の「燕山逢故人鄭意娘伝」を挙げ「未知即此本否」とし、『太和正音譜』所見の元・沈和の「鄭玉娥燕山逢故人」雜劇に言及する説を引く。

譚正璧はA論文で『夷堅乙志』巻7の「西内骨灰獄」を疑ったが、女鬼に関わらないとも述べる。C論文では、一転して『夷堅支景志』巻9の「王鼎尉小箱」かとし、「此事可能即為話本所叙」とした。

龐徳新は「從話本及擬話本所見之宋代兩京市民生活」（龍門書店、1974.9）の附録「本文所引各篇話本提要」で『古今小説』巻24「楊思温燕山逢故人」につき、「小説開闢煙粉類有灰骨匣一種、不知是否就是本篇」とする。

葉徳均は「小説瑣談」（『戲曲小説叢考』所収、中華書局、1979.5）の「一 灰骨匣」で、『古今小説』巻24「楊思温燕山逢故人」を挙げ、「話本中記鄭意娘頭魂不止一次、而灰骨匣又是主要關鍵、醉翁談録所著録的也當是此事」とし、『宝文堂書目』（巻中・子雜）に「燕山逢故人鄭意娘伝」「燕山逢故人」が著録されるとする。

胡士瑩は葉説を襲い、本事が『夷堅丁志』巻9「太原意娘」であり、『鬼董』巻1にも同じ話柄が見えると述べ、意娘の姓などに相違があることを指摘し、元・沈和に「鄭玉娥燕山逢故人」雜劇があるが同じ題材であろうとする。

筆者案ずるに、本事は『夷堅丁志』巻9「太原意娘」または『鬼董』巻1の「張師厚」で、『宝文堂書目』著録の「燕山逢故人鄭意娘伝」「燕山逢故人」をへて『古今小説』の「楊思温燕山逢故人」となったに相違ない。譚正璧は『三言兩拍資料』の『古今小説』巻24「楊思温燕山逢故人」において、「太原意娘」「張師厚」『宮闈聯名譜』『花草粹編』『詞苑叢談』を挙げ、「按詞林紀事卷十九宋十七作鄭意娘、所引詞苑叢談亦作意娘、有編者按語云：『林下詞選作鄭義娘。』豈詞林紀事編者所見詞苑叢談、与今本有所不同歟」とする。ちなみに「灰骨匣」から「楊思温燕山逢故人」への変化の過程については、筆者の「宋代社会と物語」が詳しく論じている。

19 呼猿洞

譚正璧は『中国古今地名辞典』により、浙江杭甯靈隱山下の呼猿洞の、『(宋)高僧伝』（巻29に見える智一の逸話、南宋銭塘靈隱寺智一伝）を挙げ、『西湖佳話』巻4「靈隱詩蹟」にも見えるとするが、「無女鬼事、似与本篇無涉」とする。

胡士瑩は、李嘯倉が『華北日報・俗文学』第32期に発表した、「宋元之烟粉平話」（1948、未見）の、『咸淳臨安志』巻23の城西武林山の呼猿洞に纏わる逸話を挙げ、「此目既属烟粉、意者必為男女相会、或猿幻為人而与人結婚事」

とする説を紹介後、『太平広記』巻445 畜獸十二の「孫恪(出傳奇)」を疑うも「此故事并未涉及呼猿洞，大概以僧人養猿故事相同，連類以為名耳」とする。

筆者案ずるに、譚、胡二氏の説くところは同じで、しかも煙粉類の「呼猿洞」とするにはあたらぬ。「呼猿洞」が「白猿洞」の誤りなら、本事としては『太平広記』444 畜獸十一猿上の「歐陽紘(出続江氏伝)」を挙げたいところ。それなら『宝文堂書目』巻中・子雑著録の「陳巡檢梅嶺失妻」、『清平山堂話本』の「陳巡檢梅嶺失妻記」が「小説」に近いもので、『古今小説』巻20の「陳從善梅嶺失渾家」はその改定版ということになる。『類説』巻12の「稽神録」に「老猿竊婦人」が収められ、『永楽大典』巻13981 戲文十七に「陳巡檢妻遇白猿精」が見える。

20 鬧宝録

待考。

21 燕子楼

譚正璧A論文は、『警世通言』巻21の「錢舍人題詩燕子楼」とし、趙景深の「警世通言的來源和影響」(『中国小説叢考』で末尾に「1936年」と附記する)により、元・侯克中「関盼盼春風燕子楼」雑劇、『南九宮譜』ならびに『九宮正始』に見える南戲「燕子楼」の残曲に言及する。B論文ではこれに『緑窗新話』(巻下)の「張建封家姫吟詩(出麗媚記)」、王暉の「燕子楼伝」を加え、C論文はさらに『遠山堂明曲品』から明・佚名の「燕子楼」伝奇を加え、清・陳娘の同名の伝奇の存在にも触れる。譚正璧『三言兩拍資料』の「警世通言巻十錢舍人題詩燕子楼」は「白氏長慶集巻第十五燕子楼三首并序」「全唐詩話巻六張建封妓」「類説巻之二十九麗情集燕子楼」「情史巻一(情貞類)関盼々」などを資料に挙げる。

胡士瑩は譚氏の挙げる、錢希白が詩を題して盼盼の鬼魂に見えた故事に加え、『夷堅丙志』巻15「燕子楼」を新たに挙げ、「兩者同為女鬼，又同属宋人伝説，未知『醉翁談録』的燕子楼故事，究属何者。就一般的狀況看，説話人往往取熟事為題材，此燕子楼当属関盼盼事」とする。

陳桂声は『類説』の「燕子楼」の内容は『緑窗新話』と同じだが、「潭州府舍燕子楼」とすると指摘し、宋元間佚名の戯文「許盼盼燕子楼」、明・竹林逸士の伝奇「燕子楼」、清・葉奕苞の雑劇『燕子楼』を追加する。

筆者案ずるに、『白氏長慶集』が淵源であろうが、小説人の種本は『緑窗新話』の「張建封家姫吟詩」で、「錢舍人題詩燕子楼」に近い内容のものであったろう。燕子楼に関わる戯曲に言及するものは少なくないが、煩を厭って挙げない。

22 賀小師

待考

23 楊舜俞

趙景深は「《青瑣高議》的重要」(『中国小説叢考』)所収。末尾に「1941年4月16日」とある)で『青瑣高議』別集巻3の錢希白内翰撰の「越娘記 夢托楊舜俞改葬」を取り上げ、元代の戯文に「鳳凰坡越娘背灯」(佚)があり、『録鬼簿』に著録される元・尚仲賢の雑劇「越娘背灯」の題目正名が「龍虎榜楊生点額 鳳凰坡越娘背灯」であることに言及し、この楊生も楊舜俞であろうとし、「越娘記」のあらすじを紹介する。また『武林旧事』著録の宋官本雑劇に「越娘道人歎」があることに言及するが、「背灯」については錢南揚『宋元南戲百

一録』の説を否定する。なお「背灯」については、村上哲見「燭背、灯背ということ一読詞瑣記」（『中国文学報』1, 1954.10）に詳しい。

譚正璧A論文は待考。B論文は趙景深説を襲いつつ、『緑窗新話』巻上の「越娘聞詩句動心（出麗情集）」を挙げ、題材が「越娘記」と異なるとする。戯曲の鳳凰坡が「越娘記」では鳳樓記であること、『剪灯新話』巻2の「滕穆醉遊聚景園記」の越娘への言及はすべて「越娘記」と一致するとも述べる。

胡士瑩は「楊舜俞」の本事を『麗情集』の「越娘記」とし、「越娘聞詩句動心」は「内容甚簡略」とする。

陳桂声は元・陶宗儀の『南村輟耕録』巻14の「婦女曰娘」に、『麗情集，陳敏兄妾越娘，貌美。兄死，遂与款狎』とあることをいう。

筆者案ずるに、「越娘記」と「越娘聞詩句動心」はまったく異なる。「楊舜俞」の本事としては『青瑣高議』の「越娘記」以外にない。『類説』巻29所収の「麗情記」に「越娘聞詩句動心」は収められていない。

24 青脚狼

待考。

25 錯還魂

趙景深「醒世恒言的来源和影響」（『小説戯曲新考』所収）は、『醒世恒言』巻14「閻樊楼多情周勝仙」の来源を「疑為宋洪邁夷堅志卷三十一鄧州南市女」とし、『情史』巻10情靈類では「草市吳女」と改名されたとし、両者の相違を述べ、宋・廉布の『清尊録』の「大桶張氏」も大同小異とするが、「草市吳女」を評して「我不相信馮氏能写得這樣好，所以我不疑心這篇是馮氏写的」としたが、この一文『中国小説叢考』では削除された。「錯還魂」との関係については述べていない。

譚正璧は待考とする。『三言兩拍資料』は「閻樊楼多情周勝仙」の資料として、新たに『龍図公案』巻6「紅牙球」を挙げる。また『清尊録』（の「大桶張氏」）につき、「按投轄録亦有此條，文字稍有不同」とし、『情史』（の「草市吳女」）は「鄧州南市女」と全同だが、末一句「清尊録所書大桶張家女微相類云」がないとする。『三言兩拍資料』も「閻樊楼多情周勝仙」と「錯還魂」との関係には一切触れない（筆者案ずるに、『投轄録』は「玉條脱」）。

龐徳新は既引の「本文所引各篇話本提要」で、『醒世通言』巻14「閻樊楼多情周勝仙」につき『夷堅志』巻31（五十巻本による）「鄧州南市女」に頗る類するが、地名、人名に相違があるとしつつ、『醉翁談録』の「錯還魂」は「疑即此篇」かとする。

胡士瑩は「閻樊楼多情周勝仙」につき『夷堅支庚志』巻1「鄧州南市女」、『情史』巻10、『清尊録』『龍図公案』を挙げるが、これまた「錯還魂」については言及しない。

筆者案ずるに、本事は「鄧州南市女」であり、「小説」は既引の『百家公案』の第93回「潘秀誤了花羞女」、第94回「花羞還魂累李辛」に近いものであり、それを改作したものが「閻樊楼多情周勝仙」であると考えたい。なお『清尊録』は『汴京句異記』巻8にも引かれる。『百家公案』の刊行は『龍図公案』のそれに先行する。

26 側金盞

譚正璧A論文は、『宝文堂書目』巻中・子雑に著録の「元宵編金盞」を挙げ、『宣和遺事』の上元張観の逸話を引くが、「似為本篇所従出；但女子不是鬼，

則又不類」とする。B論文は『宣和遺事』にかわり陸游の『老学庵筆記』巻7を引くが、「不知与話本有無関係」とする。

胡士瑩、陳桂声は『老学庵筆記』を引くのみ。

筆者案ずるに、「盞」は「錢」ではあるまいか。『拍案驚奇』巻7「唐明皇好道集奇人 武惠妃崇禪闢異法」があり、そこに葉法善に連れられた玄宗皇帝が月宮にゆき、帰途潞州城で霓裳羽衣の曲を吹き鳴らし金銭を撒いたが、後日「八月望夜有天樂臨城，兼獲金銭，此乃国家瑞兆，万千之喜」との上奏を聞き大喜びしたとの逸話が記されている。とはいえこれにも女鬼は登場しない。この話の出处のひとつとされる、敦煌発見の『葉浄能詩』には、玄宗の蜀川看灯と月宮往還に続け、浄能が術を使って呼び寄せた宮女を孕ませ、それが原因となって大羅天宮に帰るとの話柄が置かれるが、そこには金盞も金銭も登場しない。『拍案驚奇』巻7の出典については、趙景深、譚正璧などが論じており、小川陽一がそれらをまとめている。

27 刁六十

待考。

28 關車兵

待考。

29 錢塘佳夢

趙景深は孫目初版巻3明清小説部甲に「李卓吾批評西廂記卷首附」とされる「錢塘夢」をこれにあてる（譚正璧B論文は所在に「劉龍田刊本後附」を付け加える）。

譚正璧は趙説を承け、『録鬼簿』著録の元・白樸『蘇小小月夜錢塘夢』雜劇を同材ならんと推し、本事は宋・王于『司馬才仲伝』で、何薏『春渚紀聞』（巻7「司馬才仲遇蘇小」）及び『雲齋広録』（巻7奇異新説「錢塘異夢」）にも見え、『雲齋広録』が最も詳しくかつ伝奇文だから「当与話本相近」とする。また（北嬰編著）『曲海總目提要補遺（補編）』（人民文学出版社，1959.5）に見える明・沈沐の『芳情院』伝奇はこれによって作られたとする。

胡士瑩は明・梅禹金『青泥蓮花記』巻9（外編一の「蘇小小」）、田汝成『西湖遊覽志』巻16香奩豔語に「転引」されるとする。

筆者案ずるに、本事は『雲齋広録』の「錢塘異夢」ないし『西廂記』附載の「錢塘佳夢」であろう。筆者の「龍神から水仙へ—涇河幻想—」（『日本アジア研究』1，2004.3）に詳しい。『緑牕女史』巻6冥感上に「司馬才仲伝」が、『情史』巻9情幻類に「司馬才仲」がある。『曲海總目提要補編』の「芳情院」は「記司馬標遇蘇小小事。以標為芳情院主而名也。本司馬才仲伝及馮浩瀾詩，合成一段佳話，稍加縁飾云」という。

30 錦庄春遊

譚正璧はA論文で自身の「宋元戯劇与宋元話本」（未見）で述べた説を否定し、李昌祺『剪灯餘話』巻2「田洙遇薛涛聯句記」を挙げるが、「但時在洪武十七年，時代又過晚，那当然也不足根拠了」とする。B論文は以上に続け、近頃調べあてたとして『緑窗新話』巻上の「金彦遊春遇会娘（出刻玉小説）」のあらすじを述べ、「話本所叙，当即此事」とし、『情史』（巻10情靈類）にも引かれることに言及する。

孫楷第は孫目第二版で「佚 李嘯倉云：事見緑窗新話巻上金彦遊春遇会娘篇。情史巻十有李惠娘」とする。筆者案ずるに、「金彦遊春遇会娘」に最初に言及

した者は李嘯倉の「宋代通俗小説の本目：宋代通俗小説考之第三章」（『輔仁文苑』第8期，1941）ではあるまいか（未見につき不確）。「李惠娘」は「李会娘」とも表記する。

上村幸次も「金彦遊春遇会娘」に言及し「同じものである」とする。

陳桂声は『夷堅甲志』巻4の「吳小員外」につき「故事与此相類」とする。

筆者案ずるに、「金彦遊春遇会娘篇」が小説人の種本であろう、『刻玉小説』は不詳。

31 柳参軍

戴望舒は「疑即唐人常沂之柳参軍」とする。

譚正璧は戴説を是認し、「柳参軍伝」は「李朝威撰」とし、佚名とするものもあるが、其の文は『靈鬼志』及び『太平広記』巻342（鬼二十七の「華州参軍」）の『乾牒子』にもみえるとする。

胡士瑩は『緑窗新話』巻上「崔娘至死為柳妻」を追加する（「崔娘至死為柳妻」は出典を記さない）。

筆者案ずるに、本事は「華州参軍」で、「崔娘至死為柳妻」は小説人の種本。

32 牛渚亭

譚正璧は牛渚の地名につき考証した後、『輿地志』の温嶠の故事により「燃犀亭」を、「相伝」として、李白の故事により「捉月亭」を紹介するが、「但此二亭本身的故事，皆女鬼無関，話本当另叙他事，而以亭為故事的中心点而已」とする。温嶠の故事は『晋書』の本伝に見える。

陳桂声は温嶠の故事を扱う志怪や明清間佚名の「燃犀記」伝奇を紹介し、吳均の『続齊怪記』の「王敬伯」により、敬伯が吳通波郵亭で女鬼と「切磋琴芸事」する故事を紹介するが、「不知話本所述，是否亦此類内容」とする。

筆者案ずるに、「王敬伯」のみに本事の可能性がある。

以上、遺憾ながら「烟粉」は「靈怪」にくらべ比定できるものが多くない。同時代に流行ったが、時を経て忘れられたもの割合が高かったからかもしれない。この意味では、洪邁の『夷堅志』の半数の巻が失われている影響が大きかったであろう。

四 伝奇

譚正璧は「凡叙男女愛情故事的話本，都歸入這一類。唐人所謂伝奇，内容本無所不包，話本則僅指愛情故事一類」とする。「男女愛情」を語ったものが多いのは事実であるが、女が男に裏切られて死に、怨霊となって復讐するもの（王魁負心）や、宋人張俞が楊貴妃に逢うという内容と思われるもの（張康題壁）もあるから、「愛情故事」にしても生人同志であったり、ハッピー・エンドであったりする必要はないようにみえる。「煙粉」との相違については比定をすべて終えた後に再度検討してみたい。

33 鶯々伝

趙景深は孫目初版により、『宝文堂書目』巻中・子雑著録の「宿香亭記(?)」としたが、後にそれを撤回した。

譚正璧A論文は、「宋元話本存佚考」の時点では趙景深説を紹介し、「亦即警世通言卷二十九宿香亭張浩遇鶯々」としたが、「宋元戯劇与宋元話本」に至り、後述の44の「牡丹記」こそが「宿香亭記」であると知ったので、この「鶯々

伝」は元稹の「会真記（亦名鶯々伝）」とするとし、宋・趙令時に「蝶恋花鼓子曲」、金・董解元に『西廂記諸宮調』、宋の官本雜劇に「鶯々六ム」、元・王德信に『崔鶯々待月西廂記』雜劇、『永樂大典』卷 13983 戲文十九に佚名の宋元戲文「崔鶯々西廂記」、明・李日華に『南西廂』などの同じ故事を扱った戯曲があるとす。B論文はこれに『緑窗新話』卷上「張公子遇崔鶯々」を追加し、「似為話本直接所拠」とする。

上村幸次は唐・元稹の作とし、『太平広記』卷 488 雜伝(記五)の「鶯々伝(元稹撰)」を挙げる。

胡士瑩は、本事は元稹の「会真記（亦名鶯鶯伝）」であるとし、『緑窗新話』の「張公子遇崔鶯々」のあらすじを紹介する。

筆者案ずるに、『緑窗新話』卷上には「張公子遇崔鶯々」と「張浩私通李鶯々」が収められる。両者は男主人公の姓と女主人公の名を同じくするが、他は異なる。この「鶯々伝」の本事は「鶯々伝」で「張公子遇崔鶯々」は小説人の種本。『類説』卷 28 所収の「異聞集」にも「伝奇」と題して収められている。「宿香亭張浩遇鶯々」については後述する。

34 愛々詞

趙景深は、孫目初版により『警世通言』卷 30 の「金明池吳清逢愛々」を挙げる。それ以前の「警世通言的来源和影響」（『小説戯曲新考』所収、世界書局、1939.1）でも「事見宋洪邁夷堅志，又見情史卷十金明池当罌女條。明范文若金明池伝奇当係演此事者，南詞新譜中存有殘文八支」としているが、「愛々詞」との関係には触れない。

譚正璧は趙説を襲い、即「金明池吳清逢愛々」、金院本の「金明池」の内容がこれと一致するかは不明、本事は『夷堅志』で『情史』卷 10 にも見えるとす。明・范文若の『金明池』は「即写此事為伝奇」とする。C論文は、『夷堅志』については甲志卷 4「吳小員外」を追記し、明・葉憲祖に『死生縁』雜劇のあることを『遠山堂明劇品』によって加える。『三言兩拍資料』の「警世通言卷三十 金明池吳清逢愛々」は、『夷堅甲志』卷 4「吳小員外」を引き「按此文亦見汴京句異記卷三鬼怪門引，情史卷十金明池当罌女條亦即此文。惟情史『南京』作『南宋』，其餘文字亦小有不同」とするが、一方で『緑窗新話』卷上「金彦遊春遇会娘」を引き「案情史卷十李会娘條，宮闈聯名譜卷五人倫下会娘條均与此同，但宮闈聯名譜著明係引夷堅志，而今本夷堅志不載，当為佚文」とする。筆者按ずるに、「金彦遊春遇会娘」以下は類話として挙げているならよいが、本事として挙げるには不適當。『情史』卷 10 は「金明池当罌女」と「李会娘」をともに収めるが、両者は明らかに別の話。「金彦遊春遇会娘」（「李会(慧)娘」）については 30「錦莊春遊」参照のこと。

胡士瑩は「吳清逢愛々，係人鬼相恋的故事，応入“煙粉”類」とし、『緑窗新話』卷下の「楊愛々不嫁後夫(蘇子美文)」ではないかとし、あらすじを紹介した後、明・梅禹金『青泥蓮花記』卷 5(「楊愛々」)もこれを引き、宋・徐仲車(章)の「愛愛歌」が附されるとす。なお、『緑窗新話』の周夷の按語によれば「今本蘇学士文集」にこの文はなく、『侍兒小名録』拾遺引蘇子美「愛愛集」で校勘したという。

筆者案ずるに、「金彦遊春遇会娘」は 30「錦莊春遊」の種本。「愛々詞」の小説人の本事は「吳小員外」と「楊愛々不嫁後夫」のいずれかであるが、いずれにも可能性がある。筆者としては「金明池吳清逢愛々」が存する「吳小員

外」を推したい。『類説』巻 29「麗情集」の「愛愛」は「楊愛々不嫁後夫」の簡略版である。『青泥蓮花記』の「楊愛々」の末尾にも「麗情集・侯鯖録」とあった。鶯々、愛々のごときヒロインの名のみに頼った比定は難しい。

35 張康題壁

譚正璧は、A論文では宋末湘潭の人張康字汝安の逸話かとしたうえで、「各書皆未見載有有関題壁の愛情故事、当另為一人」としたが、B論文で、『青瑣高議』に張兪が驪山に遊び題詩し、夢で楊貴妃とあった話があるから、康は兪の譌ではないかとし、C論文ではさらに『青瑣高議』の張兪の事は「亦見『緑窗新話』巻上及『類説』巻 46 引」とし、『輟耕録』により、金の院本に『張与孟夢楊妃』があるとす。

胡士瑩は本事不詳とする。

陳桂声は『青瑣高議』前集巻 6「温泉記 西蜀張兪遇太真」に「亳州秦醇子履撰」とあることをいう。但し「温泉記」は「為人鬼相遇事、当入“煙粉”類、或非传奇故事」とす。

筆者案ずるに、宋・劉斧の『青瑣高議』前集巻 6には、「温泉記」に先立ち「驪山記 張兪遊驪山作記」が収められている。「張康(兪)題壁」の本事は「温泉記 西蜀張兪遇太真」、ないしはこれと「驪山記 張兪遊驪山作記」を合わせたもので、『緑窗新話』の「張兪驪山遇太真(出青瑣高議)」は小説人の種本。『類説』巻 46 の「青瑣高議」には「題驪山詩」(と「驪山記」)が収められている。張兪については『雲齋広録』巻 1 の「士林清話」(『詩話総龜』前集巻 44)、『詩話総龜』前集巻 49 の「青瑣集」、宋・呉曾の『能改齋漫録』巻 5 辨誤の「題妓項帕」などに逸話が、『宋史』巻 458 列伝二百十七 隱逸中に本伝がある。

36 錢榆罵海

譚正璧、胡士瑩、陳桂声は待考。

筆者は、罵を煮または呪の譌とみて、かつて「錢榆罵海」が「張生煮海」である可能性を論じた。詳しくは「張生煮海説話の淵源再考—伝奇から話本へ—」(『東方学』56, 1978.7)を参照されたい。『元曲選』癸集巻下所収の李好古「沙門島張生煮海」も同じ題材か。この雑劇の主人公張羽と龍女はもと金童と玉女。羽と兪は同音。

37 鴛鴦灯

趙景深は、『中国小説叢考』所収で末尾に「1940 年」とある「《諭世明言》的来源和影響」の「第二十三卷 張舜美元宵得麗女」で、熊龍峯刊の「張生彩鸞灯伝」と『宝文堂書目』の「彩鸞灯伝」を挙げ、『歳時広記』の「蕙畝拾英集」にも言及し、元の戯文は「張孜鴛鴦灯」と題するが「孜一作資、二者不尽相同」とす。「鴛鴦灯」との関係には言及しない。

譚正璧 A論文は、『宝文堂書目』「彩鸞灯記」の「入話」であり、熊龍峯刊の「張生彩鸞灯伝」であり、『古今小説』巻 23 の「張舜美元宵得麗女」とす。『永樂大典』巻 13985 戯文二十一により宋元戯文に佚名の「張資鴛鴦燈」があるが、「当与話本相同」とし、本事は『歳時広記』(巻 12 上元下「約寵姫」)に引かれる「蕙畝拾英集」で、『酔翁談録』にも見えるとす(壬集巻 1 負心類「紅綃密約張生負李氏娘」)。B論文では「入話」の文字の位置を「張舜美元宵得麗女」の後ろに移す。C論文は明・徐応秋『玉芝堂談薈』巻 6 と清・兪樾の『茶香室三鈔』巻 23(「鴛鴦灯伝」)を追加する。

稲田尹は「紅綃密約張生負李氏娘」の巻首の「遊乾明寺」の下注「據太平広

記云慈孝寺」に触れ、「この注は、「乾明寺とは太平広記に拠った称であり、慈孝寺のことである」と解せられる」が、「広記中に、乾明寺と慈孝寺の称をいまだに見出し得ない」と述べ、乾明寺は『東京夢華録』巻3(大相国)寺東門街巷に見える「街北旧乾明寺、沿火改作五寺三監」とあるのが、慈孝寺は『事物起原』巻7に見える「故駙馬都尉吳元辰宅」がそれで、後者は宋の仁宗の時に建立されたから「広記に見える筈はなく、又、乾明寺と関係があるとは考えられぬ」とも述べる。また文末の「(事見)太平広記(云々)」にも言及し、「何れも、当時太平広記を重視していたことに因る、説話人の作為と見る」とする。

筆者案ずるに、「鴛鴦灯」は「張生彩鸞灯伝」ならびに「張舜美元宵得麗女」の入話と同一話柄に相違ない。但し『宝文堂書目』の「彩鸞灯記」は巻中・楽府に著録されているから「小説」とはみなせないし、子雑著録であったとしても入話の有無がわかるはずはない。『太平広記』の問題については、筆者の「話本と「通俗類書」—宋代小説話本へのアプローチ—」に言及がある。「小説」に限らず、物語は時と所、主人公の名を替えて語り継がれてゆくものである。なお、『僧尼孽海』も「乾明寺尼」としてこの話を収める。ちなみに孫目初版巻8附録一存疑目の「鴛鴦灯伝」が参考になる。

38 夜遊湖

譚正璧はA論文で、孫楷第の『日本東京所見中国小説書目提要六卷大連図書館所見中国小説書目提要不分卷』(国立北平図書館中国大辞典編纂處, 1932)巻6 明清部五「通俗類書」の記載を承け、『万錦情林』巻2の「秀娘遊湖」かとする。C論文は胡士瑩の「秀娘遊湖」全文引用を承け、全名が「裴秀娘夜遊西湖記」であるとし、「疑」を「即」に変える。

筆者案ずるに、P・Hananは「宋元白話小説—評近代纂年法」で「秀娘遊湖」には明代の地名がみえるから、宋代のままとはみなせないとする。地名、人名をそれが語られた時代のものにかえるのは「小説」に限らず物語の特徴である。『万錦情林』以外にも、余泗泉萃慶堂刊の『新刻増補全相燕居筆記』巻5上層にも「裴秀娘夜遊西湖」が収められている。

39 紫香囊

譚正璧A論文は宋・趙九成の事を述べたかと疑い、『六十種曲』の明・邵燦の『香囊記』のあらすじを紹介するが、史実に合わないし妻と離散再合の話もないから「話本所叙、当出之民間伝説」とする。C論文は冒頭に『南詞新譜』により宋元戯文「紫香囊」があることを追記する。

胡士瑩は『宝文堂書目』(巻中・楽府)に「香囊記」が著録されることをいい、譚説を紹介の後、銭南揚『宋元南戲輯佚』所収の「楊実錦香囊」戯文の佚曲に言及するが、「錦香囊」と「紫香囊」が同じか否かは不明とし、さらに『夷堅丙志』巻11の「錦香囊」のあらすじを紹介する。

筆者案ずるに、譚、胡二氏とも「囊」の文字の見える戯曲などを紹介するが、「紫」の要素がみえるのは宋元戯文「紫香囊」のみで、すでに逸して残曲も存在しない。待考。

40 徐都尉

譚正璧A論文は徐徳言の楽昌公主破鏡重円の事かとし、(『録鬼簿』により)元・沈和に「徐駙馬楽昌分鏡記」雑劇が、『永楽大典』巻13969 戯文五に「楽昌公主破鏡重円」戯文が見えることをいい、本事として唐・孟棻の『本事詩』を挙げる。B論文では『酔翁談録』癸集巻1 重円故事に「楽昌公主破鏡重円」

があることを加え、C論文では明・張鳳翼の「紅拂記」に言及があることをいう。

稲田尹は『太平広記』巻166 気義一の「楊素(出本事詩)」を本事に挙げる。

胡士瑩は「此故事，宋代大曲、戯文，元代雜劇，均有演唱者」とする。

筆者案ずるに、本事は『本事詩』の「楊素」，「樂昌公主破鏡重円」は小説人の種本。『類説』巻51所収の「本事詩」では「樂昌公主」と題される。『本事詩』については、王夢鷗の『唐人小説研究』第三集本事詩校補攷釋(藝文印書館，1974.11)が参考になる。

41 惠娘魄偶

譚正璧A論文は「惠娘」は「倩娘」の譌かとし、即陳玄裕の『離魂記』(『太平広記』巻358 神魂一「王宙(出離魂記)」)とし、元・趙公輔と鄭光祖に「迷青瑣倩女離魂」雜劇が、佚名に「王家府倩女離魂」(『南九宮譜』著録)があるとする。また『太平広記』から「王宙(出離魂記)」と同巻の「龐阿(出幽明録)」「鄭生(出靈怪録)」「韋隱(出独異志)」を挙げ、「都与倩娘事相髣髴」とする。B論文はこれに『綠窗新話』巻上「張倩娘離魂奔壻(出異聞録)」を加え「当為話本直接所本」とするが、C論文では、明・佚名『離魂記』伝奇を『曲海總目提要補編』から、王驥徳の「倩娘離魂」を『遠山堂明劇品』から拾い、胡士瑩の下記の説を承け、或るものが「惠娘魄偶」を『紅梅記』伝奇の李慧娘のことを述べたかとするが、「不確。一則李慧娘名字不見于宋人著作中，二則時代在宋將亡時，似太晚了些」とする。

上村幸次は、「曲海總目提要卷七紅梅記の解説に元人の稗史綠衣伝を引き、其末に伝中の女子は乃ち李慧娘なりとあり。其の内容を見るに本小説である。

(此の小説亦明の馮夢龍の情史卷十に綠衣人と題して収められる。)」とする。筆者案ずるに、確かに「元人稗史内有綠衣人伝云」とあるが、「中間李慧娘等数折，借用綠衣人伝」ともある。

胡士瑩は明・周朝俊の『紅梅記』伝奇を挙げ、「『紅梅記』伝奇係根拋宋元以來的民間伝説敷衍而成。元周一清《錢塘遺事》云…今伝《紅梅記》劇本，与《錢塘遺事》所載的情節相合。《醉翁談録》惠娘魄偶的情節雖已不得而知，我們從《紅梅記》所叙，也略可窺見其故事輪郭」とする。

筆者案ずるに、譚氏は「王宙(出離魂記)」を、上村、胡二氏は「綠衣人伝」をそれぞれ本事とする。「元人の稗史綠衣伝」とは『綠窗女史』巻7 冥感下・幽合所収の元・吾衍の「綠衣人伝」を指そう。但し綠衣人は李慧娘と名乗っていないし、「李会(慧)娘」と同内容でもない。『錢塘遺事』(巻5「賈相之虐」)は綠衣人が前世に目撃した事件を語ったいわば挿話。「金彦遊春遇会娘」即「李会(慧)娘」は30「錦莊春遊」であって「惠娘魄偶」にはあたらない。『類説』巻28所収「異聞集」の「離魂記」，『情史』巻9 情幻類の「張倩娘」(篇末に「唐人作離魂記」とある)とも「王宙」の話であり、「惠娘」を「倩娘」が変更されたものとみることが許されるなら、本事は「王宙」，『綠窗新話』の「張倩娘離魂奔壻」が小説人の種本となろう。「綠衣人伝」も捨てがたいが、元・延祐間の事とされるうえ、主人公趙源は綠衣人の死後靈隱寺で僧となり生涯を終えたとなっているから、『醉翁談録』の成書時期を元の後半、場合によっては明初に引き下げることが必要になろう。

42 王魁負心

譚正璧はA論文で、張邦幾『侍兒小名録拾遺』が本事で、『雲齋広録』巻6

「麗情新説下」の「王魁歌并引」に「賢良夏噩嘗伝其事」とあるから、柳貫を作者とする説は誤りであり、「此為宋元時候盛伝的故事」とし、以下宋官本雜劇に「王魁三郷題」、元・尚仲賢に「海神廟王魁負桂英」雜劇があり、『南詞敘録』に佚名の「王魁負桂英」と「王俊民休書記」戲文（後者は『永樂大典』巻13973 戲文九にも見える）が、元・柳貫に「王魁伝」があるとし、明・楊文奎の「王魁不負心」雜劇、王玉峯の「焚香記」伝奇は翻案とする。B論文は、『類説』巻34「摭遺」の「王魁伝」と『酔翁談録』辛集巻2 負約類の「王魁負約桂英死報」に言及する。

上村幸次は『酔翁談録』辛集巻2の「王魁負約桂英死報」に言及する。

胡士瑩は『新刊大字魁本全相増奇妙注釈西廂記』及び『題評西廂記』の付録に収められるとする。また明万曆末刊の『小説伝奇』（正しくは『最娛情』）に「王魁」が収められており、情節が「与《酔翁談録》所記大致相近、文字古朴簡潔、可能宋人作品」とする。

筆者案ずるに、本事は「王魁負約桂英死報」で、『最娛情』第3集「古今小説」の下冊に収められる「王魁」が「王魁負心」に近い。『情史』巻16 情報類に「王魁」が、『青泥蓮花記』巻5 記節二に「桂英(元人詞作姓謝)」がある。『緑窓女史』巻5 縁偶下の「尤悔」に「王魁伝 宋・柳貫」が収められる。『最娛情』は順治四年に江南の南明支配地域で刊行されたと推定される。詳しくは拙稿「坊刻本と物語」(『日中韓書物史論叢(仮題)』所収、勉誠出版、2021)を参照されたい。ちなみに、男と女の間には死をはさんで結ばれる誓約とうらぎりの物語としては「霍小玉伝」、18「灰骨匣」の「意娘」の物語とこの「王魁負心」が突出している。拙論「宋代社会と物語」(『東洋文化研究所紀要』129, 1996.2)に詳しい。

43 桃葉渡

譚正璧は晋の王献之が桃葉を娶った故事かとし、『古今楽録』を引き、清・石韞玉の短劇集『花間九奏』に「桃葉渡江」一齣があるとする。

筆者案ずるに、『類説』巻51「古楽府」に「桃葉歌」が、『情史』巻24 情跡類に「桃葉」がある。

44 牡丹記

趙景深は『銀字集』所収の「重估話本的時代」では言及せず、『中国小説叢考』に再収の際に末尾に「1941年」と記したものは孫目初版の「宿香亭記」を挙げる。

譚正璧A論文は、即『宝文堂書目』(巻中・子雑)の「宿香亭記」で、亦即『警世通言』巻29「宿香亭張浩遇鶯々」とする。元・睢景臣の「鶯々牡丹記」雜劇、『九宮正始』に見える佚名の「張浩」戲文はすべてこれと同一題材とする。「宿香亭張浩遇鶯々」は文言体で、伝奇小説を改作したものかと推し、後半の情節は「鶯鶯灯」に似るとする。B論文は、『青瑣高議』別集巻4の「張浩 花下与李氏結婚」を伝奇文として挙げ、『緑窓新話』(巻上)の「張浩私通李鶯々」につき、「只敘至二人私通、並無結果」とする(原文は「夫婦恩愛、偕老百年。生二子、皆登科矣」)。

胡士瑩は『警世通言』の「宿香亭張浩遇鶯々」の末尾に「話名宿香亭張浩遇鶯々」とあることに言及する。

筆者案ずるに、「張浩 花下与李氏結婚」が本事、「張浩私通李鶯々」は小説人の種本で、「宿香亭張浩遇鶯々」が「小説」の明代版。

45 花萼楼

譚正璧は、花萼楼は唐・玄宗の建てたものだから、『唐紀』に見える「五王帳」のことかとし、『次柳氏旧聞』にも見えるが男女愛情故事がないから、「似非話本所取材」とする。

上村幸次も同意見だが、『醒世恒言』巻2「三孝廉讓産立高名」の入話にそれが見えることに言及する。

陳桂声は『新唐書』巻81「三宗諸子」を引き、清・夏綸に『花萼吟』伝奇、有情痴に『花萼楼』伝奇があるが、やはり男女情愛のことはないとする。

筆者案ずるに、『緑窗新話』巻下に「楊妃竊寧王玉笛(出詩話總龜)」があり、そこでも「五王帳」が言及される。また『顧氏文房小説』などに収められる樂史の「楊太真外伝」巻上にも「五王帳」が見える。『宋史・藝文志』は「楊妃外伝一卷」を「不知作者」として著録し、『直齋書録解題』巻7伝記類は「楊妃外伝一卷、直史館臨川樂史子正撰」とする。

46 章臺柳

趙景深は『銀字集』所収の「重估話本的時代」ではこれに言及せず、『中国小説叢考』に再収の際に末尾に「1941年」と記したものでは、孫目初版の「失記章臺柳記」にあてる。

譚正璧A論文は、『宝文堂書目』に「失記章臺柳」があり、明・熊龍峯に「蘇長公章臺柳伝」がありこれと同名とし、鄭振鐸の「蘇長公章臺柳伝風格極為幼稚、当是宋元之物」とする説を紹介しつつ、未見を理由に「是否即為本篇、却還有問題」とし、宋元戯劇で「章臺柳」といえば唐・許堯佐の「章臺柳伝(亦作柳氏伝)」の故事が多用されるとして、金院本「楊柳枝」、元・石君宝と喬吉の「金錢記」雑劇、鍾嗣成の「寄情韓翃章臺柳」、『九宮正始』所引の「章臺柳」戯文、明・梅鼎祚「玉合記」、張四維の「章臺柳」、吳長儒の『練囊記』伝奇などを列挙する。B論文に至り初めて『緑窗新話』巻上「沙吒利奪韓翃妻(出異志)」と『醉翁談録』癸集巻2「重円故事」の「韓翃柳氏遠離再会」を挙げる。

上村幸次は『太平広記』巻485(雑伝奇二)所収の「柳氏伝 許堯佐撰」で、唐・孟榮の『本事詩』情感第一、『醉翁談録』癸集巻2にも見えるとする。

潘寿康は『話本与小説』の「蘇長公章臺柳伝」で、熊龍峯刊の「蘇長公章臺柳伝」につき、入話の七言絶句が韓翃の詩であり、本文の前半は些か「柳氏伝」に似、後半は「有些像于鄴的揚州夢記」とする。だが、杜牧と湖州女の故事であるから「宋代的説話人往往根拠唐人的伝奇作為藍本、這裏却憑空捏合了兩個故事来帰附東坡、是很特殊的」とする。

胡士瑩は「蘇長公章臺柳伝」につき、『醉翁談録』の「章臺柳」で『宝文堂書目』の「失記章臺柳」とし、「這個故事是從唐許堯佐《柳氏伝》敷衍而成、不過把主人公韓翃易為蘇軾、而後半的情節、則頗似于鄴的《揚州夢記》」とし「沙吒利奪韓翃妻」のあらすじを紹介する。

陳桂声は関連する戯曲を追加するのみ。

筆者案ずるに、本事は「柳氏伝 許堯佐撰」であり、「小説」の演目も『緑窗新話』や『醉翁談録』に鑑み主人公は韓翃の故事であつたらうが、その後「蘇長公章臺柳伝」のように変わったとみたい。吳曉鈴輯「哈仏大学所蔵高陽齊氏百舍齋善本小説跋尾」(『明清小説論叢』1, 春風文芸出版社, 1984.5)によれば、哈仏燕京大学哈仏燕京学社漢和図書館所蔵の齊如山旧蔵本『章臺柳』四巻十六回到齊如山の「自言自語、宛然代言体、与雑劇、伝奇無異、這種体裁在小

説中尚属僅見」の按語がある。ちなみに、『類説』巻28所収の「異聞集」に「柳氏述」が、巻51所収の「本事詩」に「章臺柳」がある。

47 卓文君

趙景深は『銀字集』所収の「重估話本的時代」では「卓文君」に言及せず、『中国小説叢考』再収の際に末尾に「1941年」と記したものでは、孫目初版に従い、『宝文堂書目』の「風月瑞仙亭」ならびに三桂堂本『警世通言』巻24の「卓文君慧眼識相如」にこれをあてる。

譚正璧A論文は、『宝文堂書目』の「風月瑞仙亭」、清平山堂刊本(「風月瑞仙亭」)に加え、「亦見警世通言卷六入話、亦即三桂堂本警世通言卷二十四卓文君慧眼識相如、未知是否即此篇」とする。以下同題材の戯劇は多いとして、宋官本雜劇「司馬相如」、元・関漢卿と屈子敬、佚名に「相如題柱」雜劇、范居中等集体創作の「鸚鵡裘」、孫仲章の「卓文君白頭吟」、湯式「風月瑞仙亭」、戯文として佚名の「司馬相如題橋記」をあげ、明・孫柚の「琴心記」伝奇、袁于令の「鸚鵡裘」にも触れる。C論文はさらに複数の戯曲作品を追加する。

胡士瑩は『緑窗新話』巻下に「文君窺長卿撫琴(出司馬相如伝)」があることをいう。

陳桂声は宋元間佚名戯文「卓氏女鴛鴦会」、関漢卿と屈恭之に「昇仙橋相如題柱」雜劇、佚名雜劇に「卓文君駕車」、明・朱権に「卓文君私奔相如」のあることを追記する。

筆者案ずるに、「文君窺長卿撫琴」は小説人の種本、「小説」は『警世通言』巻6「兪仲举題詩遇上皇」の入話、三桂堂本『警世通言』巻24の「卓文君慧眼識相如」の原形であったろうが、時の経過とともに新鮮味を失って単独で語られることがなくなったとおぼしい。『史記』巻117「司馬相如列伝」が本事。『類説』巻28「異聞集」に「相如挑琴」が、『情史』巻4情俠類(と巻6情愛類)に「卓文君」がある。

48 李亜仙

趙景深は孫目初版の「李亜仙記」とする。ちなみに孫目初版は「存(?) 宝文堂目著録 明余公仁刊燕居筆記七有鄭元和嫖遇李亜仙記、文甚短拙」とする(『宝文堂書目』巻中・子雜に「李亜仙記」が著録される)。

譚正璧A論文は趙説を襲い、本事は唐人白行簡の「李娃伝」とし、元に高文秀の「鄭元和風雪打瓦罐」、石君宝の「李亜仙詩酒曲江池」の両雜劇、戯文に「李亜仙」、明・徐霖に伝奇「繡襦記」(一作鄭若庸、亦作薛近兗)があるとす。B論文は、『醒世恒言』巻3「売油郎独占花魁」の入話に見えること、『酔翁談録』癸集巻1に「李亜仙不負鄭元和」があることを追加する。C論文は、『明万曆刊小説傳奇合刊』(正式名は『最娛情』)に「李亜仙記」が収められることを追記する。

上村幸次は『太平広記』巻484(雜伝記一)の「李娃伝(出異聞集)」を挙げる。

陳桂声は、「唐佚名有話本《一枝花話》」をいう。

筆者案ずるに、『類説』巻28「異聞集」に「汧国夫人伝」が、『情史』巻16情報類に「滎陽鄭生」が収められる。『新刻増補全相燕居筆記』巻5上にも缺題ながら「李亜仙記」と同じものが収められる。『最娛情』の「李亜仙記」は首二葉を欠く。戴望舒に「読《李亜伝》」(『小説戯曲論集』所収)がある。

49 崔護覓水

譚正璧A論文は、『警世通言』巻30「金明池吳清逢愛々」の入話で、唐・

孟榮『本事詩』に出るとし、戯曲として宋官本雜劇の「崔護六么」と「崔護逍遙樂」、元・白樸と尚仲賢の「十六曲崔護謁漿」雜劇、佚名の「崔護覓水」戲文、明・孟稱舜の「桃花人面」、金懷玉の「桃花記」、佚名の「題名記」と「登樓記」伝奇などを挙げる。B論文は『緑窗新話』(巻上)の「崔護覓水逢女子(出本事詩)」を追記する。

上村幸次は「本事詩情感第一に見ゆ」とし、『太平広記』巻 274(情感「崔護(出本事詩)」)を挙げる。

筆者案ずるに、『類説』巻 51「本事詩」に「桃花依旧咲春風」がある。金院本に「謁漿崔護」がある。成化説唱詞話の『仁宗認母伝』に「断得崔護為夫婦」とあるから、元曲によって知られるごとく包公の裁きで決着がつくという情節のものであったのではあるまいか。『情史』巻 10 情靈類に「崔護」がある。

50 唐輔採蓮

譚正璧は宋官本雜劇に『唐輔採蓮』があるが伝わらないとし、最初は元・関漢卿の「双提屍冤報汴河冤」と鄭光祖の「三落水鬼泛採蓮舟(題目作二陰魂屈死汴河冤)」がそれかとみたが、雜劇は「似為公案, 恐不確」とし、『西湖二集』巻 13 の「張採蓮隔年冤報」挙げるも「亦為公案, 且不涉兒女情事, 似亦無關」とする。

筆者案ずるに、本事としては「張採蓮隔年冤報」の原話で差支えあるまい。「伝奇」の 49、50 は「公案」の要素を持っていたため「公案」に近いこの位置におかれたのであろう。

ひるがえって、「伝奇」の内容ならびに範囲についてであるが、それぞれの演目に比定しうる候補に鑑みる限り、「伝奇」は「煙粉」や「公案」と画然と区別されていたはずとする考え方が訂正されるべきは明らかであろう。では「伝奇」をいかに定義したらよいか。筆者としては、唐代伝奇を中心とする、小説人からみて伝奇体で書かれたとみなせる作品をもとに小説人がアレンジした演目が「伝奇」に属する演目であるとみたい。

五 公案

譚正璧は「公案」は「顧名思義就可知道, 可以不必另作解釈」とする。裁判に関わるものというつもりであろう。

51 石頭孫立

趙景深は「石頭孫立」を朴刀の「青面獸」、捍棒の「花和尚」「武行者」とともに「均為水滸」とする。

譚正璧は「疑即水滸故事中的孫立」とするも、「大宋宣和遺事、忠義水滸伝以及其他各書中, 孫立的綽号是「病尉遲」, 而都不叫「石頭」とし、公案の要素がないことも理由に、『水滸伝』の孫立が登州で解珍、解宝を援けて梁山に上った故事が「石頭孫立」かは不明とする。以上の点については、上村幸次、胡士瑩、程毅中(『宋元話本』, 中華書局, 1980.10)も変わらない。

謝悦「《醉翁談録》所載小説名目本事考」(『学林漫録』10, 1985.5)の「《石頭孫立》」によれば、『青瑣高議』(前集)巻 4「王実 孫立為王氏報冤」であり、「石頭」は主人公孫立の身分が「市西狗屠」、簡稱「市屠」だからで、「石頭

孫立」は「市屠孫立」の音転かとする。

舒群「一個話本書目的更生」(『文学遺産』1986-1)はこれを承け、「所謂“石頭”者、不過“実投”諧音之誤」とする。

筆者案ずるに、本事が「王実 孫立為王氏報冤」であることは間違いない。但し「石頭」の解釈についてはいずれとも決めがたい。

52 姜女尋夫

趙景深は孫目初版が『宝文堂書目』により著録する「孟姜女集」にこれをあてて、戴望舒はこれを「此集非話本、孫氏誤記」と否定する。

譚正璧は「這本是個民間最盛伝的故事、本事来歴很古」とし、『列女伝』以下を挙げ、「最完備而与民間所伝最相近」なものは『瑠玉集・感応篇』所引の「同賢記」のものとし、金院本「孟姜女」、元・鄭廷玉の「孟姜女千里送寒衣」雑劇、戯文の「孟姜女送寒衣」は同じ題材かとするが、戴望舒の指摘には「不知究竟如何」と留保する。筆者案ずるに、おそらく「孟姜女集」が子雑に著録されるからであろう。

胡士瑩は「孟姜女変文」に言及し、錢曾の『讀書敏求記』巻2・伝記類にも「孟姜女集」二巻があり、その解題から、これが「不過是哀集有関孟姜女詩文之專集、其非話本明甚」と述べる。

筆者案ずるに、「姜女尋夫」が孟姜女のご故事であることに間違いはない。路工編の民間文学資料叢書之三『孟姜女万里尋夫集』(上海出版公司、1955)に収められる、伝奇、子弟書、鼓詞、宣講、南詞、宝卷所収の作品のいずれか、またはそれらを組み合わせたものに近い。なかでは南詞の『絵図孟姜女尋夫全伝』四巻十六回が備わる。ちなみに『宝文堂書目』巻中・楽府には「孟姜女貞烈戯文」「孟姜女死哭長城」が著録されている。

53 憂小十

待考。

54 驢塚兒

待考。

55 大焼灯

待考。

56 商氏兒

待考。

57 三現身

趙景深は、孫目初版により『警世通言』巻13「三現身包龍図断冤」とする。

譚正璧A論文は、「三現身包龍図断案」だが「本事来源不詳」とし、金院本の「三献身」は「疑与之同題材」とし、C論文は「金院本」を「宋官本雑劇」と替え、「清揚州説書人浦琳演為《清風閣》評話三十二回。故事雖大有發展、但輪廓不變、仍以包公断冤、奸人伏法作結」と追記する。

胡士瑩は宋官本雑劇、金院本双方に「三献身」があるとし、「三現身包龍図断冤」には明人の手が加わっているとする。

筆者案ずるに、「小説」は「三現身包龍図断冤」の原形であろう。

58 火吹籠

待考。

59 八角井

趙景深は『警世通言』巻23「樂小舎拚生覓偶」につき「情史巻七樂和條情

節相似、惟較簡、潮王救命的事情不曾写在裏面」とする。但し「八角井」との関係には言及しない。

譚正璧A論文は、『夷堅志』の「南豊知県」を挙げるが、「此為靈怪故事、非公案、当非是」とし、『太平広記』巻399(八角井)の「八角井(出西陽雜俎)」についても「目雖同、内容亦無公案意味」とする。C論文は、「有関“八角井”的故事、唐宋時代很多」として、『太平広記』巻232(器玩四)引『原化記』(明鈔本作出録異記。類説32引作出傳奇)及び巻422(龍五)引『傳奇』の周邯の故事、巻399(八角井)引の『玉泉記』(の「賈耽」)、同巻引の『西陽雜俎』、宋人話本『喜樂和順記』(即『警世通言』巻23「樂小舎拵生覓偶」)に言及し、最後に『夷堅志』巻1の「南豊知県」を挙げて、「以上故事、以靈怪為多、似是是非」とし、「比較近似」のものとして『龍図公案』巻2の「石獅子」を挙げるが、「為晚明作品、可能即根拠宋人話本而作、所以它只能称是《八角井》話本的發展、而非《八角井》故事来源」とする。

上村幸次は譚正璧A論文に「周邯」を追加し、「やはり靈怪に属し、このままでは公案とは関係がない」とする。

胡士瑩は「平妖伝」に言及し、『曲海總目提要』巻28に見える「井中天」も全篇『平妖伝』を演じたもので、やはり八角井に言及するとし、「故事到明代已發展為公案兼妖術、已非原来之旧」とする。『剪灯新話』巻1所収の「三山福地記」は元代の話であるが、これにも「八角井」がでてくる。或いは旧説から採ったかとし、さらに『二刻拍案驚奇』巻24「庵内看悪鬼善神 井中談前因後果」を挙げるが「不知与此目有關係否」とする。

筆者案ずるに、趙景深の挙げる「樂小舎拵生覓偶」と『情史』巻7(情痴類「樂和」)には樂和が八角井を覗き込み運勢を占う趣向があり、「南豊知県」は八角井中の女鬼に趙某が魅せられることになっていて、前者は潮神に、後者は土地神に救われることになっている。だがともに公案とよぶべき趣向はない。そもそも井戸、とりわけ八角の井戸は異界への入口と意識されていた。掘誠に関連する一連の論考がある。筆者はかつて「龍図公案」に先行する『百家公案』第59回「東京決判劉駙馬」を挙げ、「この話は『淮南子』俶真訓にも見える起源の古い予言された洪水説話に動物の報恩譚をからめ、八角琉璃井に落ち行く方不明となっていた玉印をめぐる公案としたもので、八角井を名目とする公案に相応しい」としたが、後に元・武漢臣の『包待制智賺生金閣』にも八角井がでてくることに気づいた。「八角井」が失われた宝物(玉印、生金閣)をめぐる事件を包公が裁くというものであったなら、「東京決判劉駙馬」と『包待制智賺生金閣』のいずれかがそれに近いかもしれない。なお『類説』巻32所収の「伝奇」も「周邯」を収める。

60 藥巴子

待考。

61 独行虎

待考。

62 鉄秤槌

待考。

63 河沙院

待考。

筆者案ずるに、元・張国賓に「相国寺公孫合汗衫」雜劇があり、以下のごと

き内容である。開封の質屋金獅子屋の主人張孝友が、妻玉娥をともない徐州の東岳廟への船旅の際、用心棒の陳虎に黄河に突き落とされ、妊娠中だった玉娥は陳虎の妻にされ、陳豹を生む。孝友出発後、失火で金獅子屋が全焼したため、孝友の父母は乞食に零落れる。十八年後、武科挙受験のため母に渡されたしるしの片身の汗衫をもって上京した陳豹は、相国寺で施餓鬼を行い、祖父母に巡り合って徐州の金沙院での再会を約して帰郷する。母から真相を知らされた陳豹は、かつて孝友が助け、今は巡検となっている趙興祖と協力し、陳虎を殺して張姓にもどる。孝友が金沙院で僧になっていたため、一家はそこで団円した。以上の情節は『西遊記』の三蔵法師の出生譚、いわゆる「江流和尚」の物語のバリエーションのひとつであって、筆者の「王府と原小説—江流和尚の物語から「西遊記」を考える—」（『埼玉大学紀要 教養学部』29, 1994.3）に詳しい。もし徐州の金沙院が河沙院ともよばれていたなら、これが「河沙院」に相応しいかもしれない。なお「相国寺公孫合汗衫」には後述の「大朝（相）国寺」である可能性もある。

64 戴嗣宗

譚正璧は「疑即水滸故事中的神行太保戴宗，但因名字中多一「嗣」字，恐怕另有其人亦未可知，不敢下断」とする。

筆者としては待考としたい。

65 大朝国寺

趙景深は「朝」は「相」の誤りとする。

譚正璧は趙説に同意し、元・張国賓の『相国寺公孫合汗衫』雑劇を挙げる。

胡士瑩は魏堯西説として、朝は相の「字形近之誤」で「疑即叙簡帖和尚事，因這件公案正是在相国寺中揭穿的」とする説を紹介するが、『清平山堂話本』の『簡帖和尚』の題下注「亦名胡姑姑又名錯下書」によれば「似不会再有其他名称」だから、「魏説可商」とし、譚正璧説を紹介する。その後、趙景深の『水滸伝』第6回の林冲の故事とする説（出處不明）を略述し、「這件公案，皆由大相国寺相識魯達而起。當時説話，既能有花和尚、武行者、青面獸、石頭孫立，可能也会有林冲的故事」とする。

筆者案ずるに、『百家公案』第41回の「妖僧或撰善王錢」は『平妖伝』第11回から第13回にかけての弾子和尚の話であるが、これに「大相国寺」の可能性がある。筆者に「公案話本から公案小説集へ—「丙部小説之末流」の話本研究に占める位置—」（『集刊東洋学』47, 1982.5）があり、これに言及している。『三遂平妖伝』の刊行は万暦十年代後半から二十年代にかけてと推定され、『百家公案』にやや先んじる。妖術の演目に「貝州王則」が挙がっているから、『平妖伝』も『水滸伝』や『西遊記』と同様「小説」の演目との深いかかわりを持っている。ちなみに『百家公案』の第30回以前には増補の文字が冠されている。ちなみにその第27回「拯判明合同文字」、第29回「判劉花園除三怪」は『清平山堂話本』の「合同文字記」ならびに「洛陽三怪記」であり、『宝文堂書目』巻中・子雑に「合同文字記」、「洛陽三怪」として著録されている（別に「合同記」があるが、「合同文字記」と同じかは不明）

66 聖手二郎

趙景深は『醒世恒言』巻13の「勘皮靴児単証二郎神」につき、明初人作で、巻中に「老郎伝流」の語があるから、「大約是第一次写成文字的。以前只是口頭伝説而已」とするが、「聖手二郎」には言及しない。

譚正璧は『宝文堂書目』（巻中・子雑）の「勘靴児」で、『醒世恒言』巻13の「勘皮靴児單証二郎神」であるとし、鄭振鐸の「明清二代の平話集」の「大有非宋人不辦之概。這是一篇帶些偵探小説意味的公案傳奇」とする説を紹介するが、「聖手」二字については「仍不解，且無着落，所以仍不敢断定」とする。

胡士瑩は「勘皮靴児單証二郎神」を元人の作品とする。

陳桂声は明・范文若に「勘皮靴」伝奇があるなどと戯曲作品を補う。

筆者案ずるに、「聖手二郎」は「勘皮靴児單証二郎神」の原形とみてよかろう。なお『金瓶梅』の主人公西門慶の十友の一人雲離守につき雲裡手の諧音で、「手伸得很長，想撈別人的老婆和錢財」の意との説（魯歌・馬征編著『《金瓶梅》人物大全』，吉林文史出版社，1991.7）に対し，筆者は「運離手（運のつき）」の可能性を指摘したことがある（拙論「玉皇廟から永福寺へー『金瓶梅』の構想(続)ー」，『東洋文化研究所紀要』137，1999.3）。この「聖手」については諧音の可能性はなく，盗み上手といった意味なのではあるまいか。

六 朴刀局段

譚正璧は「都敍用刀槍的英雄故事，但不可考的很多」とする。上村幸次は「朴刀」、「捍棒」はいずれにも水滸の豪傑が出てくるが，恐らく武器の相違でわけたものであろう。しかし物語の性質からいえば，とくにわかる必要もないものと思われる」とする。筆者は上村説に同意したい。

67 大虎頭

待考。

68 李從吉

譚正璧A論文は待考とする。C論文は『水滸全伝』第78回の梁山泊攻撃に参加した十節度使の一人，「隴西漢陽節度使李從吉」がその人とし，其の餘の九節度使も「原来都是綠林出身，受了招安，得就此職」というから「李從吉」は「当叙其一生始末，較此為詳」とする。

胡士瑩は譚正璧以前に，『水滸全伝』第78回に見える十節度使のうち，徐京、楊温、李從吉の三人は「旧日都是綠林叢中出身，後來受了招安，直做到許大官職」とあるから，三人とも『水滸伝』中の人物で，「後來變節投降的。至于他們落草的情形，今伝本『水滸』却没有提到」とする。

馬蹄疾「宋人話本《徐京落草》、《李從吉》本事考略」（『文史』12，1981.9）も胡士瑩と同様に述べる。

筆者案ずるに，清水茂訳『水滸伝』第11冊（岩波文庫，1983.6）の「あとがき」は徐京のことのみ述べ，李從吉に言及しない。十節度使の李從吉、楊温、徐京に初めて気づいたのは胡士瑩であろう。胡氏のいう『水滸全伝』は1975年上海人民出版社排印本を指そう。

69 楊令公

譚正璧A論文は「敍宋代楊家將故事的小説」で「這篇話本當專敍令公事」であって，元・関漢卿及び朱凱の「昊天塔孟良盜骨」雜劇と同題材とする。C論文は関漢卿の「孟良盜骨」と朱凱の「昊天塔孟良盜骨」に分け，清初・李玉に「昊天塔」伝奇があるとする。

胡士瑩は「今伝本《楊家將》第十八回“李陵碑楊業死節”，京劇亦有《李陵碑》一目」とする。

陳桂声は朱凱の雑劇を「放火孟良盜骨殖」とする。

筆者案ずるに、「楊令公」が楊業を主人公とするものであることは間違いない。筆者は生ける楊業を主人公とする故事をあてる胡士瑩説に左袒する。なお、「朴刀」にこだわると、楊家槍との関係で楊業の武器が刀か槍かという議論に流れるが、上村幸次の考え方に従い、不毛の議論は避けるべきであろう。

70 十條龍

孫楷第は孫目初版巻1 宋元部で『也是園目』の「宋人詞話」により「山亭児」を挙げ、「存 警世通言卷三十七。按宝文堂目子雜類也是園目十並有山亭児。通言作万秀娘仇報山亭児。結云：『話名只喚作山亭児，亦名十條龍陶鉄僧孝義尹宗事跡。』其為此本無疑」とする（下線部は失記）。

譚正璧A論文は、『宝文堂書目』の「山亭児」で『警世通言』巻37の「万秀娘仇報山亭児」とし、孫目初版をそのまま引く。B論文では、引用に「陶鉄僧」を補い、A論文では見ることが出来なかったとした「万秀娘仇報山亭児」のあらすじを紹介する。

胡士瑩は『述古堂書目』の注に「一名朴刀事跡一名十條龍」とあることを述べる。

筆者案ずるに、「朴刀局段」に「十條龍」と「陶鉄僧」の両者がともに挙がっている以上、この当時、両者がいまだ「山亭児」の如く融合していなかった可能性や、「小説開闢」を執筆した者が、一方が他方の異名であることを認識していなかった可能性も考えるべきであろう。前者の場合なら、「万秀娘仇報山亭児」即「山亭児」の「亦名」とされる「十條龍陶鉄僧孝義尹宗事跡」についても、「十條龍」「陶鉄僧」「孝義尹宗」がそれぞれ別人を指す以上、ひとつの「小説」に三人の登場人物の名がついていたことになり、明らかに不自然である。それゆえ「山亭児」を語った小説人自身、「山亭児」と「十條龍」以下のかつての関係を知悉していたかは疑問と言わざるをえないことになる。『水滸伝』に登場する楊志、魯智深、武松がかつて自身を主人公とする「小説」を持っていたような、或いはかつて独立した「小説」の主人公だった李從吉、徐京、王温が『水滸伝』では名ばかりの存在に零落したような関係が、「山亭児」と十條龍、陶鉄僧、孝義尹宗との間に存在したかも知れない。

71 青面獸

譚正璧は、青面獸が楊志の綽号だから「当為敘水滸中的楊志売刀故事」とし、『宣和遺事』の当該部分を紹介する。譚氏以後の研究者もこの見解に異は唱えない。

筆者案ずるに、譚氏を含め、研究者は誰一人関連する戯曲作品に触れない。「青面獸」に限らず、「朴刀」や「捍棒」の演目には、待考とせざるをえないものや候補を挙げても同一題材の戯曲を挙げることができないものが多い。おそらく登場人物が男にかたよっていた関係で戯曲の題材にはなりにくかったのであろう。

72 季鉄鈴

待考。

73 陶鉄僧

70「十條龍」を参照のこと。

74 頼五郎

待考。

75 聖人虎

待考。

76 王沙馬海

待考。戴望舒は「王沙」「馬海」と二篇に分けるべきとするが（77の「燕四馬八」についても同様）、具体的な比定はしていない。

77 燕四馬八

待考。

七 捍(桿)棒之序頭

78 花和尚

譚正璧は、『宣和遺事』の天書に魯智深の綽号が花和尚となっていることを根拠に、「這也是水滸故事之一」とし、元・佚名の「魯智深大鬧（C論文で「喜賞」と改める）消災寺」と「魯智深大鬧黄花峪」、明・朱有燾の「豹子和尚自還俗」を挙げる。

筆者案ずるに、魯智深を主人公とするものに相違ないが、『水滸伝』に見えるその落草譚の全体か一部か、一部ならどの部分かは不明。

79 武行者

譚正璧は、「花和尚」と同じ根拠で武松を主人公とする「水滸故事之一」とし、皮黄戯に「武十回」があり、元雜劇に高文秀の「双献頭武松大報仇」、紅字李二の「折担児武松打虎」と「窄袖児武松」があり、明伝奇に沈璟の「義俠記」があるとし、あわせて「折担児」と「窄袖児」は諧音で武松の綽号ではないかとする。

胡士瑩は、金院本の「打虎艶」を追加する。

陳桂声は清・唐英の雜劇「十字坡」を追加する。

筆者案ずるに、張岱『陶庵夢憶』巻5「柳敬亭説書」に柳敬亭が「景陽崗武松打虎」を語ったとの記事があるから、景陽崗の虎退治の話である可能性がある。

80 飛龍記

譚正璧は「当是宋太祖趙匡胤出身的故事」とし、『警世通言』巻21「趙太祖千里送京娘」かは不明だが、元雜劇に彭伯成の「四不知月夜京娘怨」、羅本の「趙太祖龍虎風雲会」でも言及されていたであろうとし、宋元戯文に佚名の「京娘四不知」、明伝奇に佚名の「風雲会」があるとする。明の小説である『飛龍伝』や『南宋志』に宋太祖開国のことが述べられているが、この「飛龍記」との関係はわからないとする。

胡士瑩は『四庫全書總目提要』史部八「雜史(類存目一)」に著録される「飛龍記」一卷に言及し、金院本の『陳橋兵変』は「或即從此出」とし、元末に存在した平話『趙太祖飛龍記』は「大概就是從宋代説話人口頭伝留下來的講史書」で、その基本情節は『金槍全伝』と『飛龍全伝』に保存されているとする。さらに林紘の『畏廬瑣記』の、陳華なる者が趙匡胤の得物が棒であると語っていたと思わせる記事を挙げ、「此《飛龍記》正列入桿棒類、可見趙匡胤故事、在民間芸人口中流伝の久遠」とする。

陳桂声は「趙太祖飛龍記」が『朴通辞諺解』巻下に『唐三蔵西遊記』とならび平話として挙げられていることをいう。

筆者案ずるに、「飛龍記」が趙匡胤を主人公とするものであることは間違いない。「桿棒」に属すものである以上、講史に属するとおぼしい太祖の開国譚より、青年時代の「趙太祖千里送京娘」がふさわしかろう。Hananは、元を「胡元」とするから「趙太祖千里送京娘」は明朝の作品とする。

81 梅大郎

待考。

82 關刀樓

趙景深は「關刀樓」を『宝文堂書目』巻中・子雑の「關刀樓記」とし、譚正璧がこれを承けて本事不詳とする。以後の研究者もこれに従う。待考。

83 攔路虎

趙景深は「攔路虎」を『宝文堂書目』巻中・子雑の「楊温攔路虎伝」とし、譚正璧は『清平山堂話本』に「楊温攔路虎伝」があるとこれを補う。

胡士瑩は「楊温攔路虎伝」の冒頭を引き、楊温が楊令公の孫で重立の子、排行は第三、人呼んで楊三官人とされていたと述べ、篇末の「楊温和那妻子帰京、上辺□立一件大々の功勞、直做到安遠軍節度使檢校少保」の「安遠軍節度使檢校少保」から判断し、宋人の話本であるとし、傅惜華の「無疑是出于宋人的手筆」とする説を引く。さらに文中の「才人」の称により「這個話本、大約是南宋書會中人編写的」ともする。

譚正璧C論文は、『水滸全伝』の楊温は「江夏零陵節度使」だから「楊温攔路虎伝」のそれとは「略有不同」とする。

陳桂声は「楊温攔路虎伝」の巻末が「新編小説攔路虎楊温伝」であることに言及する。

筆者案ずるに、『水滸伝』第78回に見える十節度使の一人、江夏零陵節度使楊温の落草譚を述べたものが存在しており、それが「楊温攔路虎伝」であったかは定かでない。87の「王温上辺」が「楊温上辺」であって、そちらが江夏零陵節度使の落草譚であったが夙に失われたため、安遠軍節度使檢校少保の楊温の存在を念頭に、『水滸伝』の編者がもとの王温を楊温に改めた可能性もあろう。

84 高抜釘

待考。

85 徐京落草

趙景深は「草」は「草」の誤りとする。

譚正璧A論文は趙説を引き、宋の画家に徐京がいるが、当然この人ではないだろうとする。C論文では胡士瑩説により「上党太原節度使徐京」の落草譚とする。

胡士瑩は『水滸全伝』第78回に登場する「旧日都是綠林叢中出身、後來受了招安、直做到許大官職」となった十節度使の一人の徐京の故事とするが、今伝本『水滸』にはその落草譚はないとする。

馬蹄疾「宋人話本《徐京落草》、《李從吉》本事考略」も胡説と同様に述べる。

清水茂記『水滸伝』第11冊の「あとがき」も徐京と「徐京落草」の関係にふれる。

筆者案ずるに、「李從吉」の場合と同様、胡士瑩が最も早くこの説を唱えたとおぼしい。

86 五郎為僧

譚正璧A論文は『楊家将』故事のひとつとし、元・朱凱の「昊天塔孟良盜骨」雜劇の情節を紹介し、皮黄戲に「五台会兄」があり、亦この事を述べるとする。C論文は清初・李玉の「昊天塔」伝奇を追記する。

胡士瑩は、五郎が僧となる故事は宋金の際にすでに上演されていたとし、金院本『打王枢密爨』、元・無名氏の「謝金吾詐拆清風府」第三折の王枢密のセリフなどを挙げる。

筆者案ずるに、五台山で出家した楊五郎がおりにふれ六郎を援けることは楊家将故事のお約束となっている。とはいえ「五郎為僧」と題する以上、この演目はあくまで五郎が五台山で出家するまでの経緯を語ったものでなければなるまい。明代の小説楊家将ではこの間の情節が詳述されているとは言い難い。すでに主人公が楊業の子供から六郎の子、孫へと世代交代が進んでいたのかもしれない。

87 王温上辺

譚正璧A論文は、本事不詳としたうえで、南北朝後魏の欒城人王温を挙げ、『魏書』に伝があるとするが、「不知是否即此王温」とする。C論文は宋・謝采伯『密齋筆記』巻2「莊宗為郭門高所弑」條が「馬直軍王温宿衛禁中，夜謀乱被誅」の事を紹介することに言及し、「此王温不知有無其他事跡可以編為話本」とする。

胡士瑩は、王温は音近による楊温の誤りとし、「楊温上辺戰敗金人的事跡，當時膾炙人口，故于「攔路虎」外，又有此本，不嫌重複。猶之《十條龍》外，復有《陶鉄僧》也」とする。

筆者案ずるに、胡士瑩の述べるごとき「小説」が存在した可能性はあるが、それと「攔路虎」の関係は不明。筆者の想定はすでに83で述べている。

88 狄昭認父

待考。

筆者案ずるに、狄家将故事のひとつか。

八 神仙之套數

譚正璧はすべて神仙の事蹟とする。

上村幸次は「「神仙」、「妖術」はいずれも超人的な能力が語られるが、やや傾向が違うので（神仙にはおそらく修羅場はないであろうから、語り口が違うと思われる）わかるのが妥当であろう」とする。

89 種叟神記

譚正璧A論文は、即『宝文堂書目』（巻中・子雜）の「種瓜張老」で、亦即『古今小説』巻33「張古老種瓜娶艾女」とし、本事は唐・李復言の『続玄怪録』（「張老」）で『太平広記』巻17（神仙十七）にも見えるといい、『曲海總目提要』巻18の「太平銭」伝奇もこの故事を述べており、情節もほぼ同様とする。C論文は『太平銭』の現存と作者が清初の実李玉であることを追記する。

胡士瑩は「種瓜張老」が『也是園書目』では「宋人詞話」に分類され、『曲海總目提要』の「太平銭」では張老が張果老となっていることを指摘し、金・諸雜大小院本に「菜園孤」がありこのことを演ずる、『情史』巻19情疑類に「張果老」が、『類説』巻11「幽怪録」に「韋女嫁張老」があり、後者は簡

略版であるとする。筆者案ずるに、前者の本文はすべて張老となっている。

陳桂声は明・余公仁本『燕居筆記』巻9に「張老夫婦成仙記」があるとし、李玉の『太平錢』は「張老」と、同じく『続玄怪録』の「定婚店」を組み合わせ、張老を張果老としたものという。

筆者案ずるに、「種瓜張老」の本事は「張老」で、「小説」に最も近いものは「張老夫婦成仙記」であろう。

90 月井文

待考。

91 金光洞

譚正璧は『拍案驚奇』巻28「金光洞主談旧跡 玉虚尊者悟前身」で、本事は『孫公談圃』（巻中「馮京」）の馮京のことではないかとし、宋元戯文に「馮京三元記」、明・沈寿先に「三元記」があるとする（C論文では沈寿先を沈受先に改める）。

胡士瑩は沈寿先を沈受先と正しく引く。

陳桂声は『宋史』巻317に馮京の伝があること、「宋劉延世録孫升《孫公談圃》巻中有《馮京》一則」として、「馮大參嘗患傷寒，已死，家中哭之，已而忽甦，云：適往五台山，見昔為僧時室中之物皆在。有言我俗緣未盡，故遣歸。因作文記之，屬其子，他日勿載墓誌中」を録し、これが話本「金光洞」の張本とする。さらに宋・羅大経『鶴林玉露』乙編巻4の「馮三元」を引く。また宋・金盈之『醉翁談録』巻6 禪林叢録に「馮相坐禪」一則があるとし、「可見馮京之遺聞逸事，在宋時已广为流傳」とする。

筆者案ずるに、「金光洞」の凌濛初バージョンが「金光洞主談旧跡 玉虚尊者悟前身」であろう。Hananの「宋元白話小説—評近代繫年法」は「金光洞主談旧跡 玉虚尊者悟前身」が「金光洞」と同一題材を処理している可能性を認めるが、「並不能証明其乃早期故事」とする。筆者にいわせれば、すべての現存の話本、擬話本には、それらが語られ、或いは刊行された時期の痕跡が印されていて当然である。それゆえ、明代の地名等が見えれば明代に手が増えられた証拠となるが、それがあればその故事全体が明代になって語られるようになった、或いはそれ以前には語られていなかったなどとすることはできない。

92 竹葉舟

趙景深は『宝文堂書目』著録の「陳季卿悟道竹葉舟伝」とする。

譚正璧A論文はこれに加え、本事は唐人薛昭蕴の『幻影伝』で、『太平広記』巻74(道術四)の『纂異記』（「陳季卿」）にも見えるとし、元・范康の「陳季卿悟道竹葉舟」雑劇の取材は同じで、『曲海總目提要』巻43で論じられる「竹葉舟」戯文は石崇と緑珠を主人公としており、これらとは異なるとする。B論文は「竹葉舟」を明・畢魏の伝奇とする。

筆者案ずるに、『夷堅続志』後集巻1所収の「棄名学道」は陳季卿ならぬ陳舜卿を主人公とし、竹葉舟も重要な役割を担っており、「陳季卿」の宋代版かとおぼしい。「竹葉舟」が唐代版か宋代版かは不明。

93 黄粮夢

趙景深は『宝文堂書目』著録の「黄粱夢」とする。

譚正璧A論文はこれに加え、本事は『列仙伝』及び唐人沈既濟の「枕中記」（『太平広記』巻82(異人二)所引の「呂翁(出異聞集)」）とし、元・谷子敬の「邯鄲道盧生枕中記」雑劇、明・湯顯祖の『邯鄲記』伝奇はこれに取材するが、

馬致遠、李時中等合作の「開壇闡教黃梁夢」、佚名の「呂洞賓黃梁夢」戯文は盧生を呂洞賓、呂翁を雲房とするとし、「不知話本内容究從何者」とする。B論文は蘇漢英の「呂真人黃梁夢境記」伝奇を後者のグループに追加し、C論文は前者のグループに明・佚名の「呂翁三化邯鄲店」、車任遠「邯鄲夢」を加える。

陳桂声は「黄梁夢」の本事として『北堂書鈔』卷134の「焦湖廟祝(出幽明録)」を挙げ、「此乃話本《黄梁夢》之本事」とする。

筆者案ずるに、夢中で枕の孔に入る話柄ではなく、黄梁と夢と神仙が出て来る話柄を本事として挙げるべきで、「焦湖廟祝」は肝腎な黄梁の要素を欠いている。呉元泰の『新刊八仙出處東遊記』上巻第23回「洞賓店遇雲房」も呂洞賓と雲房とするが、『歴世真仙体道通鑑』卷45の「呂岳」は呂洞賓と漢鍾離としている。

94 粉合兒

趙景深は「王月英月夜留鞋記」であり『太平広記』の「買粉兒」とする。

譚正璧A論文は趙説を引き、佚名の「留鞋記」が『元曲選』に見え、曾瑞の「才子佳人誤元宵」はこれと内容は同じだが名称は異なるのに、後人はなぜか「混而為一」しているとし、戯文に作者不詳の「王月英月下留鞋」があるとす。 「買粉兒」は『幽明録』にて、『太平広記』卷274に引かれるとしてその内容を紹介し、こちらは私合の際、少年が「樂極暴死」するが、戯曲は少年が遺された鞋を呑んで死に訴訟沙汰になるとなっている。だから「話本所叙、看了篇名、似用原来本事、而与戯劇不同」であるとする。B論文は趙説の紹介直後に『緑窗新話』(巻上)の「郭華買脂慕粉郎」を挙げ、明・童養中の「臙脂記」伝奇を追記する。

稲田尹は「買粉兒」、広記卷二百七十四、情感(出幽明録)」とする。

胡士瑩は金院本の「憨郭郎」もこの故事を演じたかとし、『幽明録』は男女皆姓名がないから郭華、王月英は皆後人が増入したものとし、邾経の「胭脂女子鬼推門」もこれを演じており、『綴白裘』に梆子腔「買胭脂」があるとす。

筆者案ずるに、『百家公案』第62回の「汴京判就臙脂記」には包公が登場する。『新刻増補戲隊錦曲大全満天春』(英国劍橋大学図書館蔵)巻下下層にも「郭華買胭脂」「相国寺不諧」の二齣が収められている。『緑窗新話』の「郭華買脂慕粉郎」を除き、『幽明録』を含め関連する多くの作品が公案のかたちをとっているが、「神仙」に置かれる以上、「粉合兒」は最後に神仙が登場し郭華を救命することになっていたかもしれない。

95 馬諫議

譚正璧A論文は待考とする。B論文は葉徳均の「読稗雜録」(『風雨談』第4期、1944.12)の『古今説海』の佚名「馬自然伝」ならびに『西湖佳話』巻30の「馬神仙騎龍昇天」とする説を紹介し、『太平広記』巻33神仙(三十三)の「馬自然(出続仙伝)」を本事に挙げるが、馬自然は諫議になっていないから「似乎不能貿然就肯定和此篇話本故事相同」とする。

孫目第二版は『古今小説』巻5の「窮馬周遭際壳飽媪」かとする。

胡士瑩は、譚説は「尚待考」だが、馬周は「雖官給諫」ではあるが、「窮馬周遭際壳飽媪」は発跡変態であって神仙ではないから孫説も「可商」とする。

謝悦は「馬諫議」はもと華山素靈宮仙官で太上の命を受けて下凡し唐朝を輔佐したとされる馬周を主人公とするもので、『太平広記』巻224(相四)「壳

餽媪(出定命録)」ではなく、卷 19 神仙十九の「馬周(出神仙拾遺)」が本事であるとし、清の雑劇「醉新豊」は題目正名に「華山仙召問素靈宮」とあるから神仙の故事であろうとする。

96 許岩

譚正璧A論文は、『警世通言』卷 40「旌陽宮鉄樹鎮妖」の原本かとし、単行本に鄧志謨の「許仙鉄樹記」があり、本事は『太平広記』卷 14(神仙十四)の「十二真君伝」及び『事文類聚』で、佚名の雑劇「許真人拔宅飛昇」があるとするが、B論文では、以上をすべて「疑不是」とし、唐・許栖岩のことを述べたもので、裴綱の『伝奇』に見え、『太平広記』にも見えるとする。C論文は許遜説をすでに否定しているのにも関わらず、『青瑣高議』前集卷 1の「許真君斬蛟蛇白日上昇」を補う。

稲田尹は「許棲岩」、広記卷四十七、(出伝奇)」とする。

陳桂声は『類説』卷 32「伝奇」に「許栖岩」があるが、『太平広記』と文字に差があるとする。

筆者案ずるに、「許岩」の本事は「許栖岩」である。

97 四仙闕聖

譚正璧A論文は待考。B論文は不詳とするも『録鬼簿続編』諸公伝奇失載名字に「□場廟四聖帰天」、簡称「四聖帰天」があるが「不知与此話本有無相同」と述べ、四聖とは鉄拐、鍾離権、呂岳、張果とする。C論文は「□場廟」を「交場廟」とする。

稲田尹は『太平広記』卷 22 神仙二十二の「羅公遠(出神仙感遇伝及仙伝拾遺逸史等書)」を挙げ、「葉法善、張果、金剛三蔵が羅公遠と術を競い、遂に伏する話(譚氏云う不詳。金剛三蔵を仙と称するのは妥当ならざる嫌いはあるが、その内容から見て恐らくはこれ)」とする。

陳桂声は新たに清初・朱確の『四聖手』伝奇を加える。

筆者案ずるに、稲田説で決まりであろう。なお「□場廟」はおそらくは「皮場廟」。

98 謝澹落梅

梅を海と疑う者はいるが、内容の比定をする者はいない。待考。

九 妖術之事端

譚正璧はすべて妖術をよくする人で剣客も含まれるとする。

99 西山聶隱娘

譚正璧A論文は、本事は裴綱の『伝奇』(『太平広記』卷 194)で、清の尤侗の「黒白衛」劇もこれを演ずるとし、「西山」の二字は衍字かとするが、B論文ではさらに踏み込み、「或為另一話本名而文字残缺」とし、C論文は「西山」の後に脱字を想定する。従って譚正璧はC論文以降「小説」の演目を百八種とする。

孫目第二版は、唐・袁郊『甘沢謡』を挙げ、『太平広記』卷 194 の裴綱『伝奇』は文が同じとし、『太平広記』の「出伝奇」を疑う。

稲田尹は「聶隱娘」、広記卷百九十四、豪侠二、(出伝奇)」とする。

胡士瑩は孫説による。

陳桂声は、唐・段成式の『剣侠伝』が伝奇文の「聶隱娘」を収めることをい

う。

筆者案ずるに、「聶隱娘」の本事が『太平広記』の「聶隱娘(出伝奇)」であることは間違いない。『類説』巻32所収の「伝奇」、巻36所収の「甘沢謡」とも「聶隱娘」の話を収めない。「西山」は不明。譚正璧は『京本通俗小説』の「西山一窟鬼」、即『警世通言』巻14「一窟鬼癩道人除怪」を疑うか。但し、これには妖術の要素はないし、11「葫蘆兒」の可能性があると既述している。

100 村鄰親

待考。譚正璧は誤字があると疑う。

101 巖師道

譚正璧A論文は、『江淮異人録』の「聶師道」かとする。B論文は、葉徳均の「読稗雑録」(『風雨談』第4期)の白樸の『閻師道趕江』雑劇と同じことを述べているかとし、「閻」は「巖」の(同音の)誤りかとする説を紹介するが、白劇については「不知所叙為何事」と留保する。

胡士瑩は明・顧元慶編の『広四十家小説』で「聶師道」の情節を紹介する。

陳桂声は宋・呉淑『江淮異人録』巻上の「聶師道」を引くが、「未見有妖術事。聶師道所為，有如俠士，而其姪化鶴昇天，則応入“神仙”類，今入“妖術”類，話本或別叙他事」とする。

筆者案ずるに、聶師道は唐末の人とされるが、『太平広記』には収められていない。筆者は閻師道説に魅かれるが、内容がわからないので待考。

102 千聖姑

譚正璧A論文は待考。B論文は『太和正音譜』より佚名の「聖姑姑」雑劇を、『也是園書目』より「女姑々説法升堂記」を挙げるが、「不知是否同題材」とする。C論文は『太平広記』巻293(神三)「聖姑(出紀聞)」と宋・龔明之『中呉紀聞』(巻4「慧感夫人」)の慧夫人亦名聖姑の話柄を挙げるが、「此二聖姑都不知与話本有無關係」とする。

胡士瑩は『平妖伝』の「聖姑宮紙虎守金山」「聖姑永児私伝法」等の回を挙げ、「不知所叙的情節与此故事有關係」と述べ、さらに元・王惲『秋澗文集』巻28の「題孝感聖姑廟壁」詩の第二首を引き、「王詩是否即詠此故事」とする。

陳桂声は聖姑廟の聖姑は已に神仙となっているから「妖術」類には属させるべきでないとする。

筆者案ずるに、譚、胡二氏はともに「聖姑」なる名をもつ女性が登場または話題となっている戯曲の演目や断片的な記事を探し当てたものの、「千」に適切な説明ができないこともあっていずれも腰の引けた説になっている。筆者としては、「妖術之事端」に配される点と「貝州王則」との関係に鑑み、『平妖伝』の聖姑の部分とする説に可能性を感じる。

103 皮篋袋

譚正璧A論文は王銍の「補侍兒小名録」の韋洵美の事を述べたかとする。C論文はこれに加え、『初刻拍案驚奇』巻4入話が述べる『香丸志』に出るといふ香丸女子の話ではないかと疑う。

胡士瑩は、本事は「補侍兒小名録」に引かれる「灯下閑談」(巻3の「韋洵美」)とする。

陳桂声は胡説を「文中寺僧僅為一仗義行俠之武林高手，并不見有何妖術」だ

から「未可遽定」とし、『初刻拍案驚奇』巻4の入話が此の話本とする。

筆者案ずるに、二説、いずれとも決めがたい。『拍案驚奇』巻4の入話は元・龍輔『女紅餘志』巻上「香丸婦人」に出る。『類説』巻52の「灯下閑談」は「韋洵美」を収めないが、明・王世貞の『劍俠伝』は「韋洵美」を収める。

104 驪山老母

譚正璧A論文はまず『西遊記』と薛家将故事に驪山老母の踪跡が常にあると述べ、その後に『太平広記』巻63(女仙八)所引の「驪山姥(出集仙伝)」に言及するが、「不知話本所叙為何事」とする。

筆者案ずるに、驪山老母は梨山老母とかかれることもあるが、家将小説では常に女将に法術と武芸を授ける存在となっている。宝巻の『玉英宝巻』にも法術武芸を授ける驪山老母が登場する

105 貝州王則

譚正璧は『平妖伝』の濫觴で、貝州人王則が妖異をもって叛乱するが、文彦博、明鎬によって平定されたことを述べ、王闢之『澠水燕談録』の「馬遂」の記すところは『平妖伝』とはやや異なるとし、『平妖伝』中の嚴三点、杜七聖、蛋子和尚などに関わる部分は「当非話本所有」とする。筆者案ずるに、『澠水燕談録』に「馬遂」の條は見当たらない。

上村幸次は『宋史』巻292の明鎬の本伝に叛乱の経緯が見えるとする。

胡士瑩は、叛乱の経緯は宋・李燾『統資治通鑑長編』、王偁『東都事略』、王闢之『澠水燕談録』、王銍『默記』などにも見えるが、李攸の『宋朝事實』巻16「岳制」の記載が「較詳」であるとして、それを引く。

陳桂声は『宋史』明鎬伝附の王則伝を引く。

筆者案ずるに、『平妖伝』の原型に相違ないが、どの程度の規模で、王則以外に誰が登場していたかは不明といわざるをえない。

106 紅線盗印

譚正璧は『太平広記』巻195(豪俠三)所引の「紅線(出甘沢謡)」が本事で、楊巨源撰とされる単篇もあるとする。明・梁辰魚に「紅線」「紅綯」二雑劇があり、後人が「双紅記」に纏めたとする。「紅線」には盗金盒はあるが盗印はないが、話本は金盒を印盒としたのであろうとする。

陳桂声は『宝文堂書目』巻中・子雑に「紅線伝」があり、『緑窗新話』巻下に「薛嵩重紅線抜阮(出甘沢謡)」があるとし、梁辰魚に「紅線女夜窃黄金盒」が、胡汝嘉に「紅線記」の雑劇があるとする。

筆者案ずるに、本事は「紅線」で、「薛嵩重紅線抜阮」が「小説」の種本であろう。

107 醜女報恩

譚正璧は待考とする

孫目第二版は『賢愚経・金剛品』の醜女のことを演じたかと疑い、敦煌の卷子に『醜女変』があるとする。

胡士瑩は孫説紹介後、『百縁経』の「波斯匿王醜女縁」、『雑宝蔵経』の「醜女頼提縁」を挙げても、これらは仏法で醜女の面貌が変わったとするもので、妖術に配される「醜女報恩」と同一題材かはわからないとする。

筆者案ずるに、いずれの経によったかは明らかでないが、仏法で醜女の面貌が変わったとする内容のものであろう。

むすび

以上で『酔翁談録』の「小説開闢」に挙がっている八類百七種の「小説」の演目の検討を終えたわけであるが、最後に、いまさらではあるのだが、そこで筆者が何の説明もせずに使ってきた用語、とりわけ本事と種本につき、筆者の考えるところを述べておきたい。

宋の盛り場瓦子で「小説」として演ぜられていた演芸は、元稹が新昌宅で市人の演ずるのを聴いた「一枝花話」の後裔であったが、「話」から「小説」と呼称が変わったことにいみじくも示唆される如く、前代より短時間で語られるものと変わり、それと同時にそこで語られる対象を拡大させたとおぼしい。具体的にいえば、前代の流れを汲む演目は「伝奇」と呼ばれることになり、新たに先ずは「靈怪」「煙粉」が、その後には「公案」「朴刀」「桿棒」、さらには「神仙」「妖術」に分類される演目が加わったとみられる。

唐代のいわゆる伝奇小説は、市人の語る「話」、すなわち物語を聴いた知識人が、さほど間をおかず文言で筆定したもの、ないしは自身つれづれにまかせ再話したものを同じく文言で書き留めたものであったようだが、いずれにせよ何らかの取材源から得た、なにがしかの事実を含んだ、いわば実話にもとづくものであったようだ。本論では、唐代に限らず、宋代以降のものであっても、これと同様な過程をへて文言によって筆定され、「小説」の演目となった物語の現存最古のテキストを本事と称することにしている。

本事を明らかにしうる「小説」即物語は、筆定されるという幸運に与ったのみならず、後述するもうひとつの幸運に恵まれた結果、今日まで伝わるのができたものであるが、そうした幸運に与ることができなかった物語も少なくなかったに相違ない。とはいえ、そうした物語にしても筆定されぬまま消え去ってしまったとは限らない。口頭の物語のまま伝えられ、時の試練をへて変容を遂げたものが、後日筆定される場合もあったろうし、かつて筆定されていた物語であっても、適度な変貌を遂げていけば、再度筆定されることもあったろう。後者の場合、一つの物語に時代背景と主人公の姓名を異にする二つ以上のバージョンが存在することになるわけである。そうした物語を語る「小説」がそのいずれのバージョンに拠るものであったかの判定は諸般の事情からなかなか難しい。物語は民間故事と同根より生じたものであったから、細部を変更しさえすれば、あたかも異なる実話にもとづく新たな物語であるかのごとく装って語ることが可能だったからである。

ひるがえって、唐代はいまだ木版印刷による書籍が存在しない時代であった。したがって、経書でもない、物語のごとき不要不急なものを筆定した著作など、筆定者本人がいかにその出来栄に自信を持っていたと、世の中によほど持て囃され、複数の写本が作成されない限り、後世に伝わることはなかったはずである。それが少なからず現代にまで伝わっているのは、個々別々に写本で伝わっていた「物語」（以下では筆定された物語の意味で「物語」をもちいる）を集めた「物語」集が作られ、それらをさらに集成した書物（類書）が編纂されたからであった。この「物語」集に相当するものが、唐代では『伝奇』や『異聞集』であり、宋代では『青瑣高議』や『雲齋広録』であって、それらをさらに集成した書物の代表が宋初の太平興国年間に敕撰された『太平広記』であり、南宋初の紹興年間に曾慥により私撰された『類説』であった。

『太平広記』五百巻はその時点で伝わっていた単篇と「物語」集所収の「物語」を含めテーマ別に編集しなおしたものであったが、『太平御覧』所収のそれに比べ詳細で（編纂の趣旨が異なるから当然ではあったが）、当初の「物語」の原姿に近いものとみなせるため、本事研究においては、宋版（あるいは覆宋明版）が伝わる数少ない個別の「物語」集以上に尊重されるべき書物といえる。だが「物語」をも収めるその性格ゆえ、版木が作成されたにもかかわらず、当初は不要不急のものとして刷印されることがなかったとされる。それゆえそれが小説人の目にとまることは、少なくとも北宋の間はなかったろう。後にはそれが徐々に江湖に広まったであろうことは確かであるが⁷、五百巻という巻数や印刷（或いは購入）にかかる費用、加えて小説人のリテラシーを考えれば、『酔翁談録』の「小説開闢」がいかにも「幼習太平広記、長攻歴代史書」を謳おうとも、小説人がそれにもとづき「小説」を語っていたとは思われない。とはいえ、何らかの手段により江湖に出回っていたそのダイジェスト版ないしはそれに類する書物により自身または第三者が作成したあらすじのごときもの（これを筆者は種本とよぶ）をもとに、随時記憶を喚起しつつ「小説」として語っていたことは考えられようし、『大唐三蔵取経詩話』のごとく、後にそうした種本が集成された種本集が瓦子の書肆から印刷販売されるようになったことも考えられよう。

『太平広記』のダイジェスト版とおぼしきものが宋代に刊行されていた記録は残されているし、それとは別の坊刻本の存在も想定されている⁸。現存最古の五百巻本の『太平広記』は明も半ばになって刊行された談愷本であった。ひるがえって、『太平広記』やそのダイジェスト版を宋、元の小説人が目にすることができたとしても、小説人がそれにもとづき種本を作成したとは考えにくい。なぜなら、それだけでは人類中の出自の古い前三類、即ち靈怪、煙粉、伝奇に属する演目に限っても、本事が宋代と考えられる演目をカバーすることはできなかったからである。それらについては『太平広記』以外の宋代の「物語」集、あるいはそうした書物をも材源とした類書を参照せざるをえなかったはずである。ではその候補としてはどんな書物が考えられるのか（なお、公案以下の後五類の「小説」の演目は、同時代即ち宋代の、或いは宋代に時代を借りて語ったもの、言い換えれば本事というべきものがそもそも存在しなかったり、一時は盛んに語られていたが、おそらくそれゆえに長篇の語り物に吸収され「小説」としては語られなくなったりした、いわば子孫にあたる「話本」が残らなかった演目であったと推察される。ちなみに、『酔翁談録』の「小説引子」の題下注には、「演史講経並可通用」とあった）。

既述の「小説開闢」には、『太平広記』以外にも『夷堅志』『琇瑩集』『東山笑林』『緑窗新話』といった書物が小説人の参考必読書として挙がっていた。このうち『琇瑩集』『東山笑林』については知見がないのだが、洪邁の『夷堅志』は主として靈怪や煙粉の演目に素材を提供したと考えられるし、『緑窗新話』は筆者のいう種本集であって、小説人がいずれかの書物から「物語」のあ

⁷ 西尾和子『太平広記研究』、汲古書院、2017.3.

⁸ 『太平広記』（中華書局、1961.9 新1版）の汪紹楹「点校説明」、並びに拙論「話本と「通俗類書」—宋代小説話本へのアプローチ—」（『日本中国学会報』28、1976.10）を参照されたい。

らすじを書き抜き手控えとした、主として煙粉、伝奇に属する演目の種本集とみなせる。羅燁の『酔翁談録』はこの『緑窗新話』所収の種本の本事ないしはそれを再収したとおぼしきものを多数収めている。

『酔翁談録』の「校印説明」は、『酔翁談録』を伝奇集であり雑俎集であって、明人の『国色天香』等の書はすべてこの書の体裁をまねたものであり、「除了伝奇文外，還有許多游戲文章。所載傳奇文，多半係軼述或節録前人作品，沒有多大價值」とあまり高い評価を与えていないのであるが、続けて、なかには貴重な資料があるとしそれを紹介する。筆者は『酔翁談録』の形態は、これに先行する劉斧の『青瑣高議』のそれをまねたものであって、『青瑣高議』こそは、『酔翁談録』や「明人『国色天香』等書」の先蹤と考えている。『青瑣高議』は劉斧自身の作品のみならず、それ以外の作品もそれと明記して収めていた。「明人『国色天香』等書」とは、孫楷第が『日本東京所見小説書目』巻6の「通俗類書」に挙げている、『国色天香』『万錦情林』『重刻増補燕居筆記』『増補批点図像燕居筆記』を指しているのだが、筆者はこれに『繡谷春容』『新刻増補全像燕居筆記』の二種を加え、そこに馮夢龍により改変され三言に収められる以前の「話本」が複数収められていること、『繡谷春容』の巻4、巻5の下層に収められている『新話摭粹』は『緑窗新話』の後裔にあたる、万暦版『緑窗新話』とでもいふべきものであることを明らかにした⁹。以上の事実により、筆者は『青瑣高議』を宋代の通俗類書とよぶこととする一方¹⁰、明代の通俗類書の特徴である二層本につき、その誕生から終焉までの消長の様相を探ってみた¹¹。

筆者の想定する種本集は、一義的には小説人の記憶喚起装置として存在したはずであるが、それを構成する個々の種本の当初の成立経緯如何については正確には知るべきがない。既存の書物から抜書されたものか、速記者のごとき人物により小説人の口演から書き留められたものかわからないからである。ただ、出典が記されている『緑窗新話』については、少なくとも後の知識人の手が加わっていることは確実である。では上述の、本事を記したあまり大部でない書物としてはどのようなものが考えられるのか。筆者は曾慥の『類説』がその一つではなかったかと考えている。

『類説』は編者曾慥の紹興六(1136)年の自序を冠する南宋初に刊行された類書である。当初の巻数はおそらく五十巻であったろうが、筆者が本論で準拠したのは、天啓六(1626)年に馬之騏と岳鍾秀によって刊行された六十巻本を嚴一萍が校訂したものである(藝文印書館、1970)。『類説』の編輯方針は『太平広記』のそれとは異なり、「物語」集をバラバラにせず一括して取り込むというものであった。とはいえ一括して取り込むと言いつつ、そのすべてを収録したわけではなく、そのうちから曾慥の基準に照らして選択したものを大幅に切り縮め、ほとんど種本、場合によってはそれ以下の短章として収録していた。こう

⁹ 前掲註8の拙論、並びに「『緑窗新話』と『酔翁談録』—万暦時代の『緑窗新話』—」(『日本中国学会報』30、1978.10)を参照されたい。

¹⁰ 拙論「宋代の通俗類書—『青瑣高議』の構成・内容よりみる—」(『日本アジア研究』6、2009.3)を参照されたい。

¹¹ 拙論「坊刻本と物語—口頭の物語の出版をめぐる—」(『日中韓書物史論叢(仮題)』、勉誠出版、2021)を参照されたい。

した類書が私纂された目的が何であったのかはわからないが、小説人あるいはその関係者のネタ探しにとって最適な書物であったことは確かである。そこには『太平広記』未収の、それゆえ小説人にとっては極めて有用な、『太平広記』編纂以後の北宋年間に成立した「物語」集も収められていたからである。『類説』は四部分類的に言えば、子部類書類に著録されるべき書物であったが、その一部、たとえば巻28の「異聞集」、巻29の「麗情集」「靈怪集」、巻32の「伝奇」などは唐代の、巻46の「青瑣高議」「続青瑣高議」などは宋代の「物語」集を収めており、小説人が手元にはうってつけの書物であった。

『緑窗新話』の現存する嘉業堂抄本（ないしそのもとづく原抄本）の筆写時期は、そこに見える避諱から、南宋の第二代皇帝孝宗の頃と推定される。すなわち『類説』と同時期ないしはやや遅れて成立したと考えられるのである¹²。当初の編纂目的が何であったにせよ、『類説』はおそらく小説人にとって種本集として役割を果たしたとおぼしく、その『類説』と同時期ないしやや後には種本集『緑窗新話』が成立していたらしいことは、「小説」と種本の関係にとって実に示唆的な事実であった。

『緑窗新話』はその後種本集から手軽な読物に役割が変わった。いわゆる「話本」が続々刊行されるようになれば、種本集としての役割は不要となるからである。かくして手軽な読物として通俗類書に収められるようになった『緑窗新話』、それが「新話摭粹」であった。「新話摭粹」は『緑窗新話』所収の、今は知る人となてなくなった話を棄て、新たな話を補充した、明万曆版の『緑窗新話』とでもいうべきものであったが、その役割はすでにかつての『類説』的なものに先祖返りしていたのである。

一方、『青瑣高議』や『酔翁談録』系統の（「転述・節録」されていたとしても）読むに堪える規模の「物語」を収めていた「物語」集も、明末には復活することになった。澹澹外史（馮夢龍）輯とされる『情史類略』二十四巻がそれである。『情史類略』は情貞類以下の全二十四の情〇類に分類した「物語」を収めており、その編纂は三言編纂と表裏の関係をもつと考えられる、文言の「物語」集であった。『情史類略』は、明代以前の書物に見える「物語」を、そこに描かれる「情」の発露の根源により類を分かって編集したもので、馮夢龍版の『太平広記』とみなしてよいものであった。馮夢龍がそこから一步を進め、引き続き『太平広記鈔』八十巻（天啓六年）を編纂するに至ったのもその流れにおいてであった。

以上簡単に「小説」と本事、種本、種本集、「物語」、「物語」集につき、筆者の考えるところを述べてみた。本論はこうした考えにもとづき、『酔翁談録』の「小説開闢」にみえる八類百七種の「小説」演目の本事ならびにその故事の変遷につき整理、考察したものである。

¹² 前掲註8の拙論を参照されたい。

《醉翁谈录》所见“小说”演目考

罗烨撰《醉翁谈录》据推定为元代刊行。甲集卷一〈小说开辟〉一节将宋代瓦子演艺之一的“小说”分为八类，所列当时“小说”演目一百零七种，对后世颇有影响。有关这一珍贵资料，已有不少先学论述，但仅凭“演目”推断，仍难免囿于局限。其中近半数演目至今尚未厘清本事。本稿就此问题梳理发微。

关键词：《醉翁谈录》、“小说”、演目、本事